「それでは、始めますね」
彼はリュートを静かにかき鳴らし、語り始める。
「これは、今よりもっと昔のお話。ここが今より栄え、街としてにぎわっていたころの物語。どんな伝記にも書かれていない、だれも記憶をしていない。忘れられた、小さな英雄譚(たん)――」

弦(げん)のひびきと声が重なる。
「安楽と清浄の国、天界。そこには慈愛にあふれる麗(うるわ)しき女神、イリアスがおりました。女神はある天使を呼びました。お調子者で、まだ子供っぽい少年の天使。彼の名は……」

「ラビエル。よく来てくれましたね。あなたに新しい使命を与えます」

女神は天使に語りかけた。

「なんでしょうか？」

ラビエルは聞き返す。

「勇者を、助けて欲しいのです」

「お金を貸せばいいんですか？」

「そうではありません。魔物と戦い続ける勇者を、負けないように補佐するのです」

「お金を貸すのは補佐じゃないんですか？」

ラビエルは再度聞き返す。

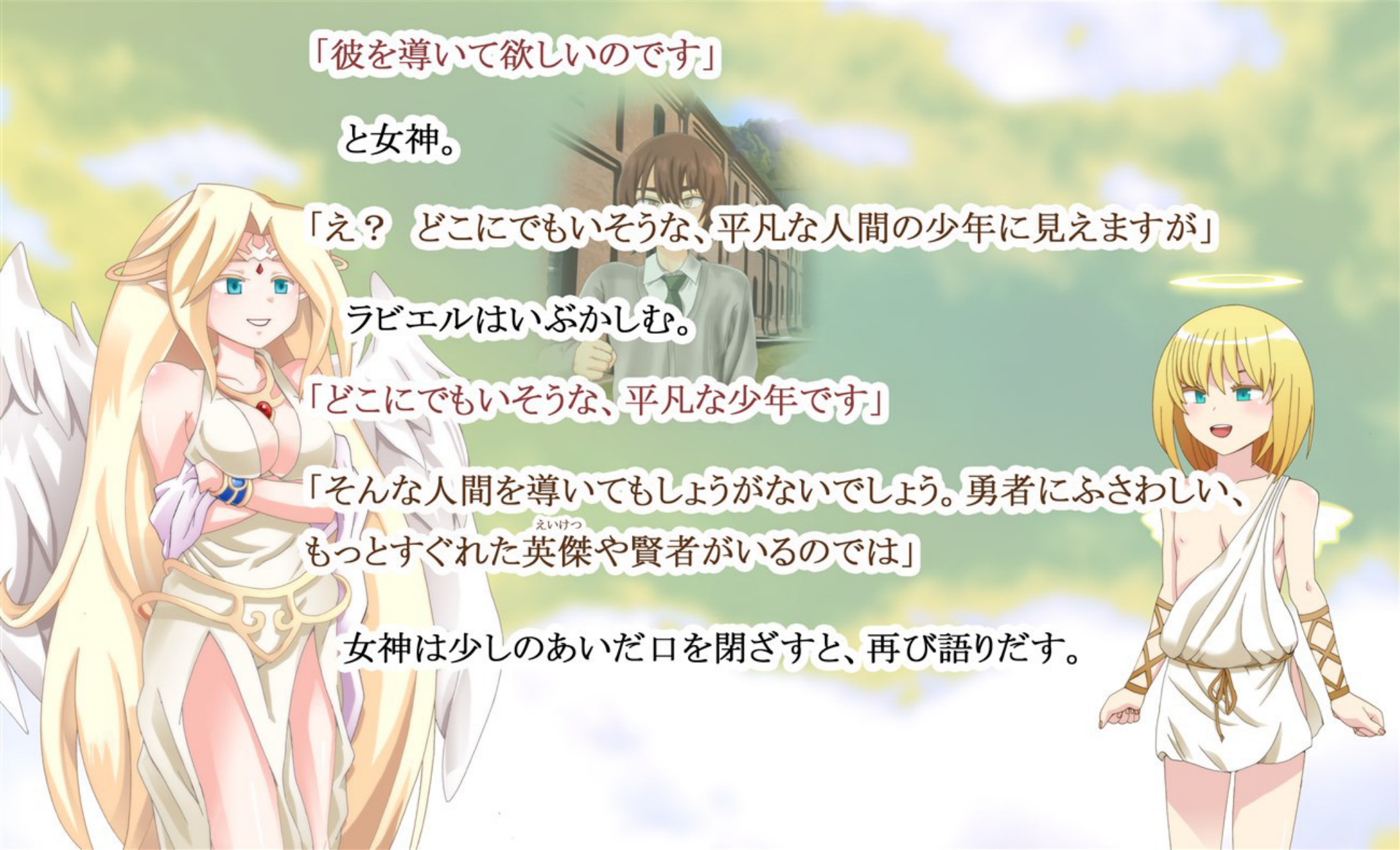
「場合によっては、補佐でしょう。それよりも、勇者としての道を誤らぬよう、導いて欲しいのです」

「お言葉ですがイリアス様。魔物と戦うだけの道なんて、誤りようがないと思いますが」

「私もそう思います。でも実際は、なかなかそうもいかないようなのですよ」

「どうしてですか？」

「それを説明する前に、これをご覧なさい」
イリアスが片手をかざすと、中空に地上の映像が映しだされた。人間の少年がひとり、映像の中で歩いている。


「彼を導いて欲しいのです」
と女神。
「え？　どこにでもいそうな、平凡な人間の少年に見えますが」
ラビエルはいぶかしむ。
「どこにでもいそうな、平凡な少年です」
「そんな人間を導いてもしょうがないでしょう。勇者にふさわしい、もっとすぐれた英傑（えいけつ）や賢者がいるのでは」
女神は少しのあいだ口を閉ざすと、再び語りだす。

「勇者ともなる者は、人々を救うという清らかなる志（こころざし）を持つもの。しかし、戦いの中で力が増大し、名声が高まり、権力を手にしていく過程で、不思議なことに、初めの志を忘れていくのです」

「そうなんですか」

「弱者や愚か者、貧しい者を見くだすようになり、逆にほかの勇者や剣豪、神官や王族などを憎むことも多くなるのです」

「ええっ？　どうしてですか」

「力と名声のある勇者は、自分をあがめ従う者以外をうとましく思い、排撃しようと考えるからでしょう」

「……」

「そして近いうちに、自分を神の再臨だのと宣言し始め、地上の者を自らの信奉者のみにしようとすらし始めるのです」

「な、なんと恐ろしいことを……！」

ラビエルは声を上げた。

「勇者に限らず、世を救おうとする神官や王族も、多くがそうなってしまうのですよ」

「分かりました！　ぼくが地上に躍(おど)り出て、そのウジ虫以下の人間どもを一匹残らず虐殺(ぎゃくさつ)して、神の怒りを見せてやります！」

「いえ……」

「ぼく一人で七つのラッパを次々と吹き鳴らし、疫病(えきびょう)、洪水、旱魃(かんばつ)、便秘など、あらゆる責め苦を与え続け、地上に阿鼻叫喚(あびきょうかん)の地獄絵図を出現させます！」

「あのですね……」

「そして飢餓(きが)と恐怖で生きながらの亡者となった人類に、イナゴの大群を送りこみ、あらゆる農作物を壊滅させ、家族が互いの肉を食(は)み合うまで追い詰めます！」

「ラビエル……」

「助けたまえと祈る人類！　しかし彼らに浮かぶ神からのビジョンは、永遠の地獄でのたうち回る己自身！さらに追い討ちでセアカゴケグモの……」

「そうではありません、ラビエル。そのような英傑たちに代わり、
この平凡な少年を勇者にするのですよ」

イリアスは高さ20センチメートルほどの、輝く楕円(だえん)の鏡を手の平から出現させた。

その鏡は把手(とって)もはめ枠(わく)もない、不可思議(ふかしぎ)なものだった。

「そ、それは……！　天界の秘宝……！」

ラビエルは驚いた。

「これを与えれば、凡庸（ぼんよう）な彼でも、半人前の勇者くらいにはなれるでしょう」

「で、でも……」

天使は困惑の表情でイリアスに訴える。

「非凡になった彼は、しばらくしたら自身の非凡さに酔って、ほかの勇者らと同じような不遜（ふそん）な者になるに決まってますよ！人間なんかに天の力を与えてはいけません」

「……ではラビエル。あなたが自分の目でたしかめて来なさい。
この少年が、勇者にふさわしいかどうかを」

「ぼくがですか？」

ラビエルはキョトンとする。

「ええ。もしふさわくないとあなたが判断したのなら、もう、
そのまま帰って来てもかまいません」

「分かりました！　ぼくがシッカリクッキリ判断して、仮に力を
与えたとしても、ビシバシとしつけて教育してやります！」

小さな妖精が飛び回り、ラビエルの顔の前に停止する。
「おっぱっぴぃーっ！」
声を上げて、手足を広げる。

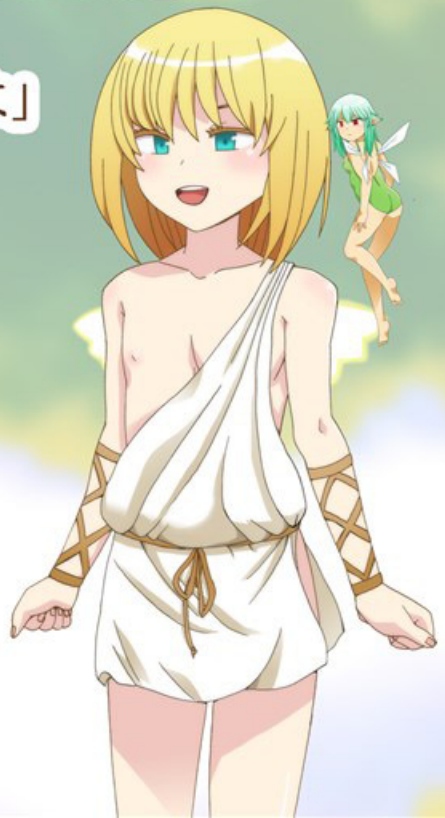
「リムル、なにを言ってんの？」

ラビエルは妖精の少女の名を呼び、語りかける。

「あんたに負けないようにボケてみたんだけど。どうかしら？」

「つまんない。似合わないマネはやめたほうがいいよ」

「あっそ。悪かったわね」



「分からないことがあれば、リムルに聞いてくださいね」

イリアスがラビエルに言った。

「そうよ。なんでも聞きなさい」

リムルも倣(なら)って言う。

「ラビエル、これを渡します。お願いしますね」

イリアスは輝く鏡をラビエルにあずける。

「おまかせください、イリアス様」

ラビエルは羽をはためかせ、飛び立つ。

「では、行ってまいります！」

もんむす・くれすと！4
～勇者様は淫乱ドMな少年天使～
体験版
天乙宮

「だから説明しろっつってんのよ！」

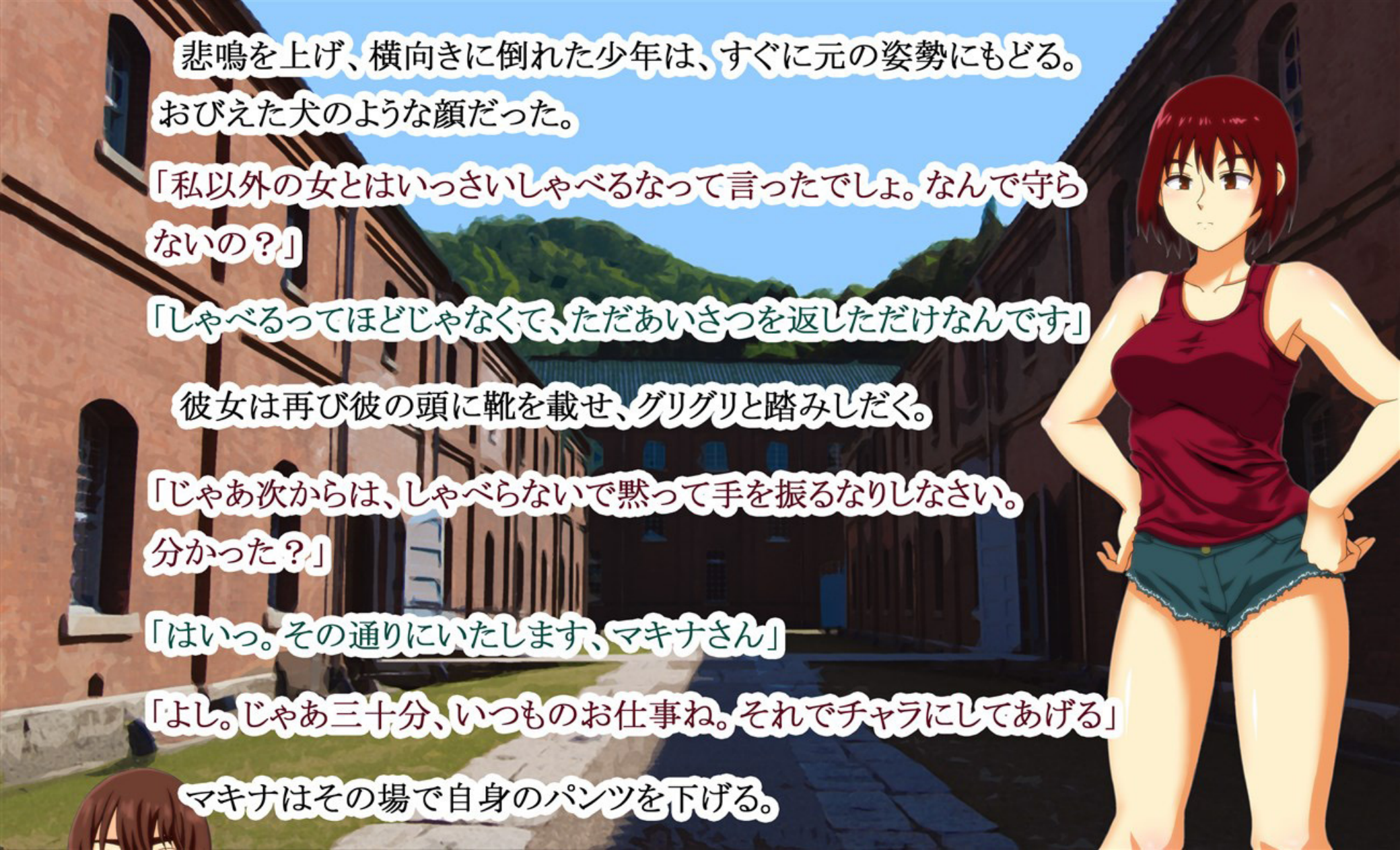
ひざまずく少年の頭に、靴が当てられる。

「えっと、それは、先ほど話した通りです」
「つまり私への当てつけってことか」
「ちがいます、ちがいます。ただ、名前を呼ばれたから、近よって少ししゃべっただけです」
全裸の少年は、石畳(いしだたみ)の上で土下座をしたまま、釈明(しゃくめい)を続ける。

もんむすくれすと！4

～勇者様は淫乱ドMな少年天使～

体験版



悲鳴を上げ、横向きに倒れた少年は、すぐに元の姿勢にもどる。
おびえた犬のような顔だった。

「私以外の女とはいっさいしゃべるなって言ったでしょ。なんで守らないの？」

「しゃべるってほどじゃなくて、ただあいさつを返しただけなんです」

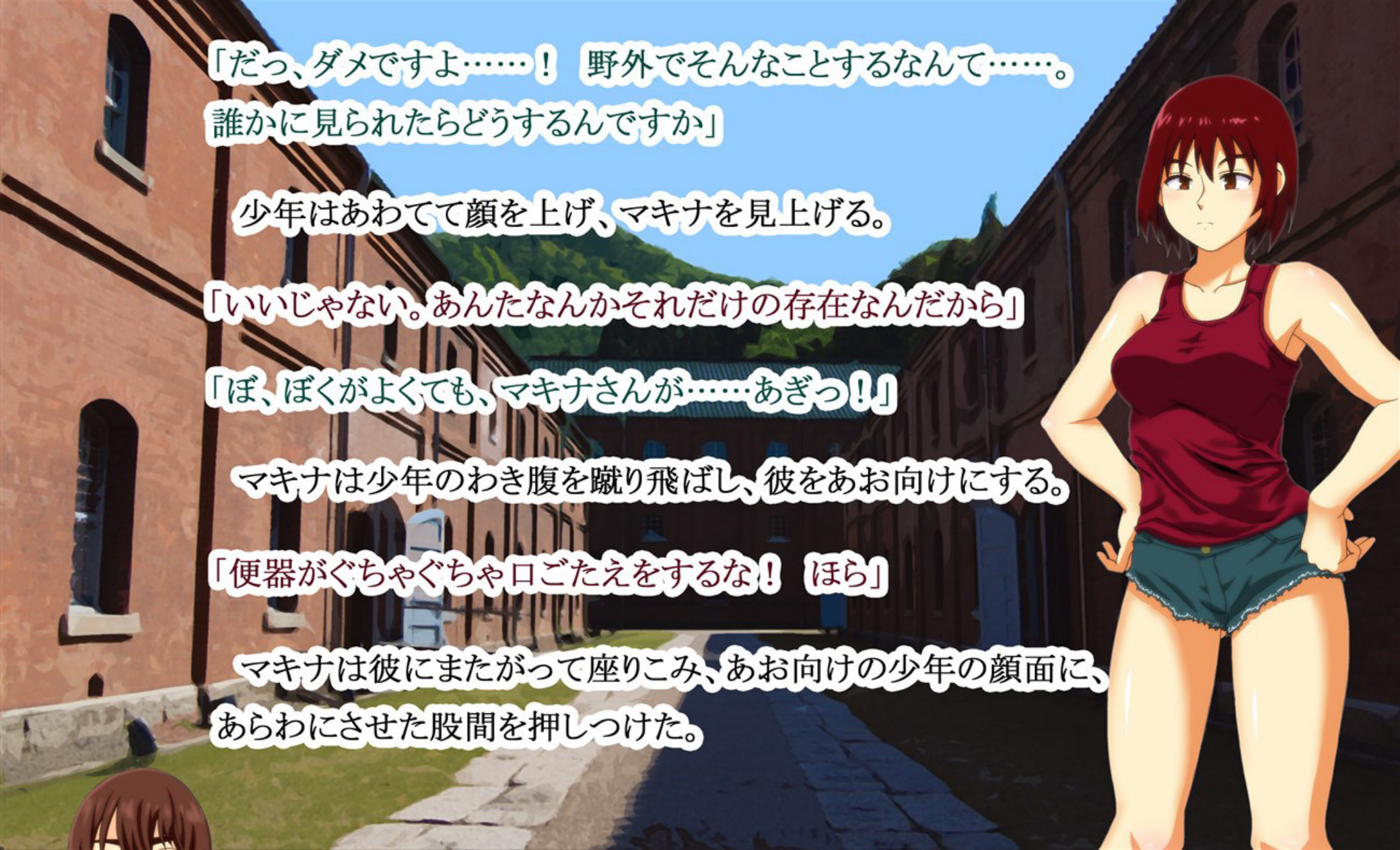
彼女は再び彼の頭に靴を載せ、グリグリと踏みしだく。

「じゃあ次からは、しゃべらないで黙って手を振るなりしなさい。
分かった？」

「はいっ。その通りにいたします、マキナさん」

「よし。じゃあ三十分、いつものお仕事ね。それでチャラにしてあげる」

マキナはその場で自身のパンツを下げる。



「だっ、ダメですよ……！　野外でそんなことするなんて……。
誰かに見られたらどうするんですか」

少年はあわてて顔を上げ、マキナを見上げる。

「いいじゃない。あんたなんかそれだけの存在なんだから」

「ぼ、ぼくがよくても、マキナさんが……あぎっ！」

マキナは少年のわき腹を蹴り飛ばし、彼をあお向けにする。

「便器がぐちゃぐちゃ口ごたえをするな！　ほら」

マキナは彼にまたがって座りこみ、あお向けの少年の顔面に、
あらわにさせた股間を押しつけた。

「はい、アズサくんのお仕事よ。しっかりやんなさい」

アズサは反射的に、口元へ押しつけられた赤いヒダを舐め取る。

湿り気を帯びた肉のヒダに舌を這(は)わせるたびに、むせ返るようなにおいが鼻をつく。

「はふ……んん……」

ピチャ

ピチャ…

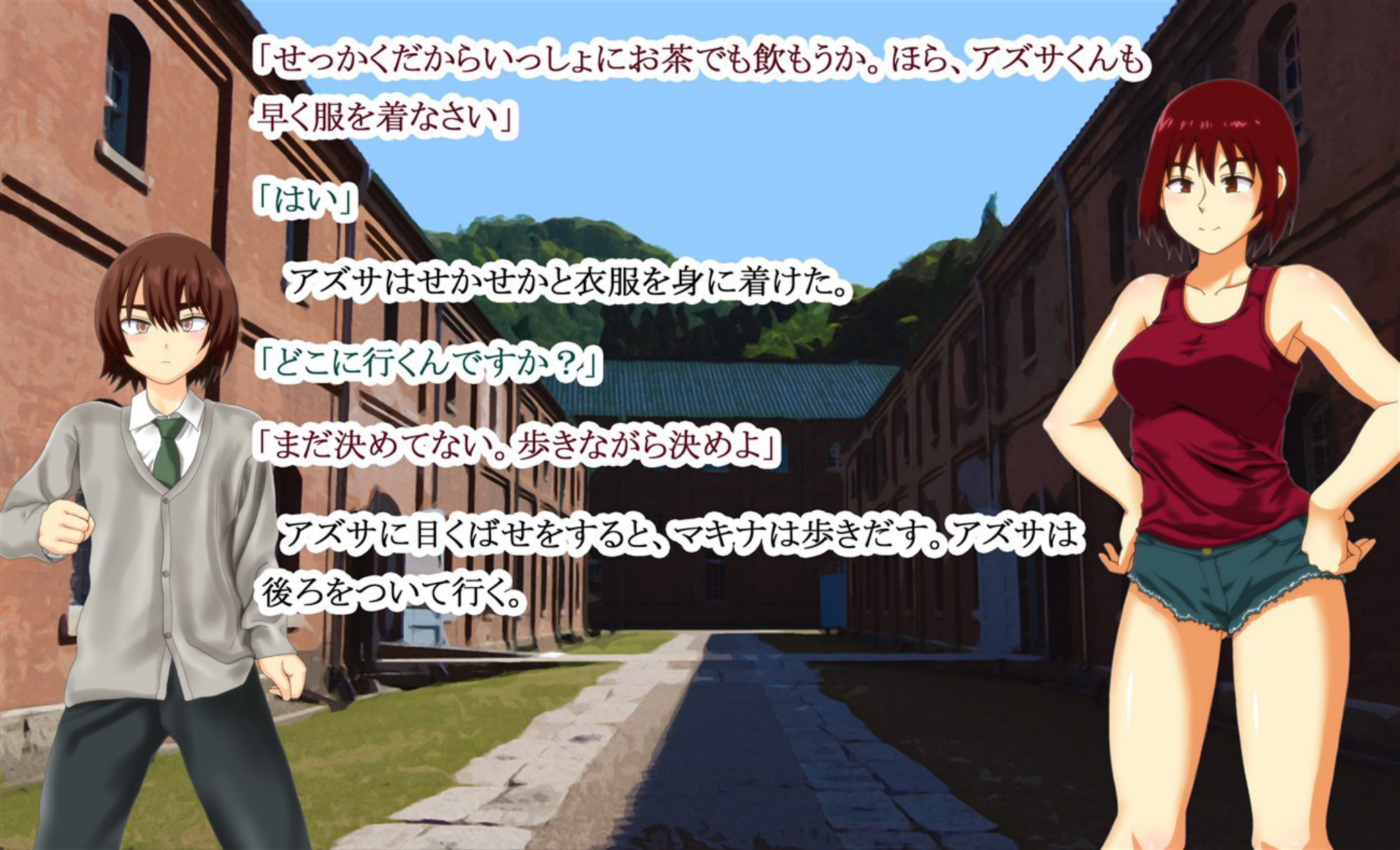
彼は舌を使ってヒダの壁(かべ)をこじ開けると、尿道から膣までをなぞるように舐め回す。

もんむすくれすと！4

～勇者様は淫乱ドMな少年天使～

体験版

尿を飲み干した彼は、ぼんやりとうつろな目で脱力する。
「んじゃ、あの件はチャラね」
マキナは腰を浮かせると、立ち上がってハンカチで濡れた
箇所(かしょ)をふき、パンツを履きなおした。


「せっかくだからいっしょにお茶でも飲もうか。ほら、アズサくんも早く服を着なさい」
「はい」
アズサはせかせかと衣服を身に着けた。
「どこに行くんですか？」
「まだ決めてない。歩きながら決めよ」
アズサに目くばせをすると、マキナは歩きだす。アズサは後ろをついて行く。

「ぺっぺけぺっのっ、ぺーっ！」
妖精は声を上げ、空中でぴょんと跳ねる。
（他人のふり、他人のふり……）
ラビエルは距離を置きつつ、ゆっくりとリムルのあとを追う。

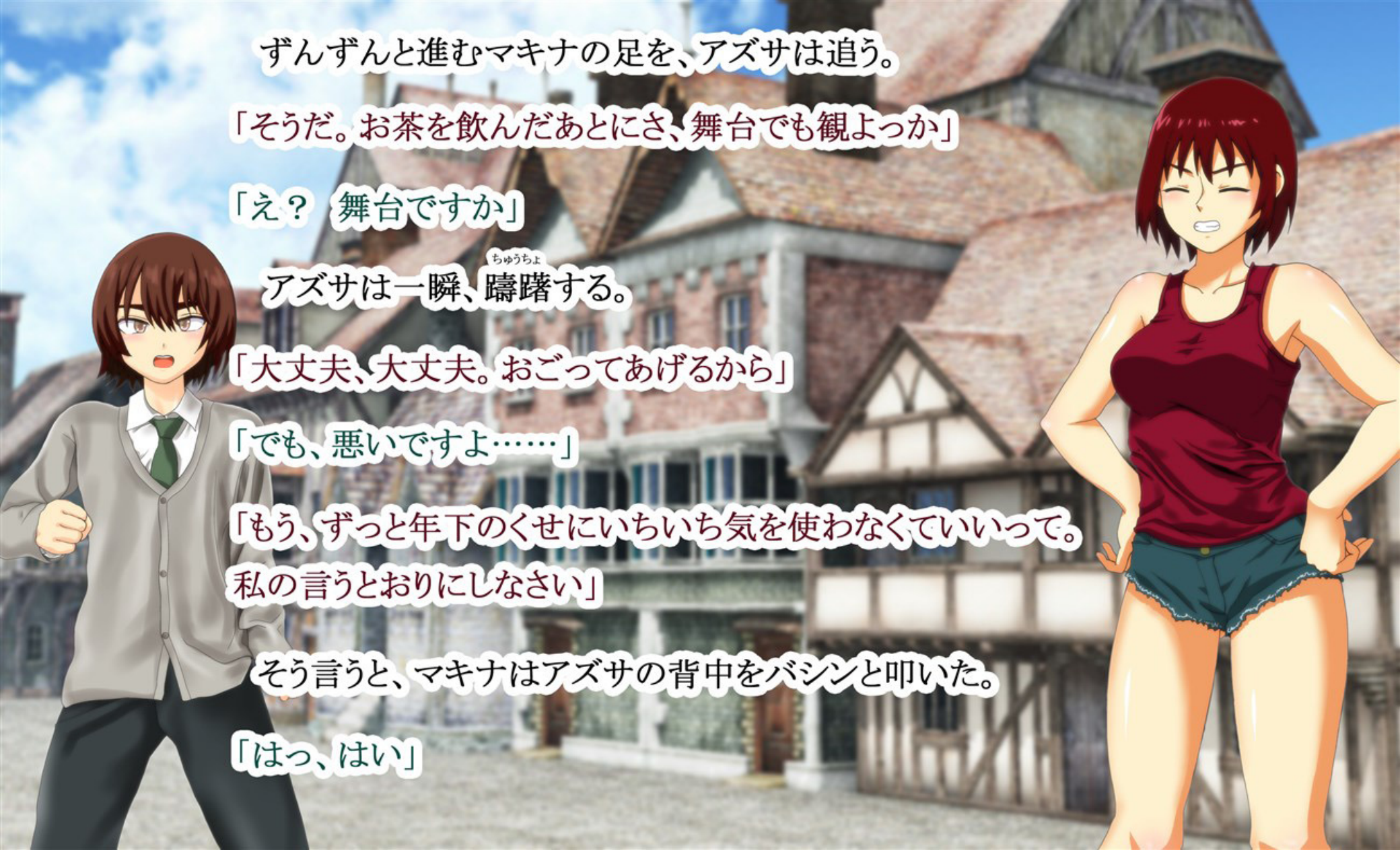
「ラビエル、早く来なさいよ。このへんに例の彼がいるからさ、準備はいい？」

「うん」

「じゃあ、私はここで待ってるわ。妖精の私がいっしょだと、可愛らしすぎて
ほんわかムードになっちゃうでしょ。天使様の威厳が台なしに
なっちゃうからね」

「それは助かるよ」

ラビエルは安堵(あんど)した。



ずんずんと進むマキナの足を、アズサは追う。

「そうだ。お茶を飲んだあとにさ、舞台でも観よっか」

「え？　舞台ですか」

アズサは一瞬、躊躇（ちゅうちょ）する。

「大丈夫、大丈夫。おごってあげるから」

「でも、悪いですよ……」

「もう、ずっと年下のくせにいちいち気を使わなくていいって。
私の言うとおりにしなさい」

そう言うと、マキナはアズサの背中をバシンと叩いた。

「はっ、はい」

二人は群集のあいだを縫(ぬ)って、繁華街を歩く。前方には人だかりが壁となり、道の視界をふさいでいた。

「あ」

マキナは前触れもなくピタリと足をとめた。

「アズサくん」

「はい」

アズサはマキナの高い背に返事をつげる。

「用事を思い出したから、お茶と舞台はまた今度ね。今日は帰ろう。ほら、こっち」

マキナはアズサの腕を取り、大通りに接する横道にぐいぐいと引っぱる。

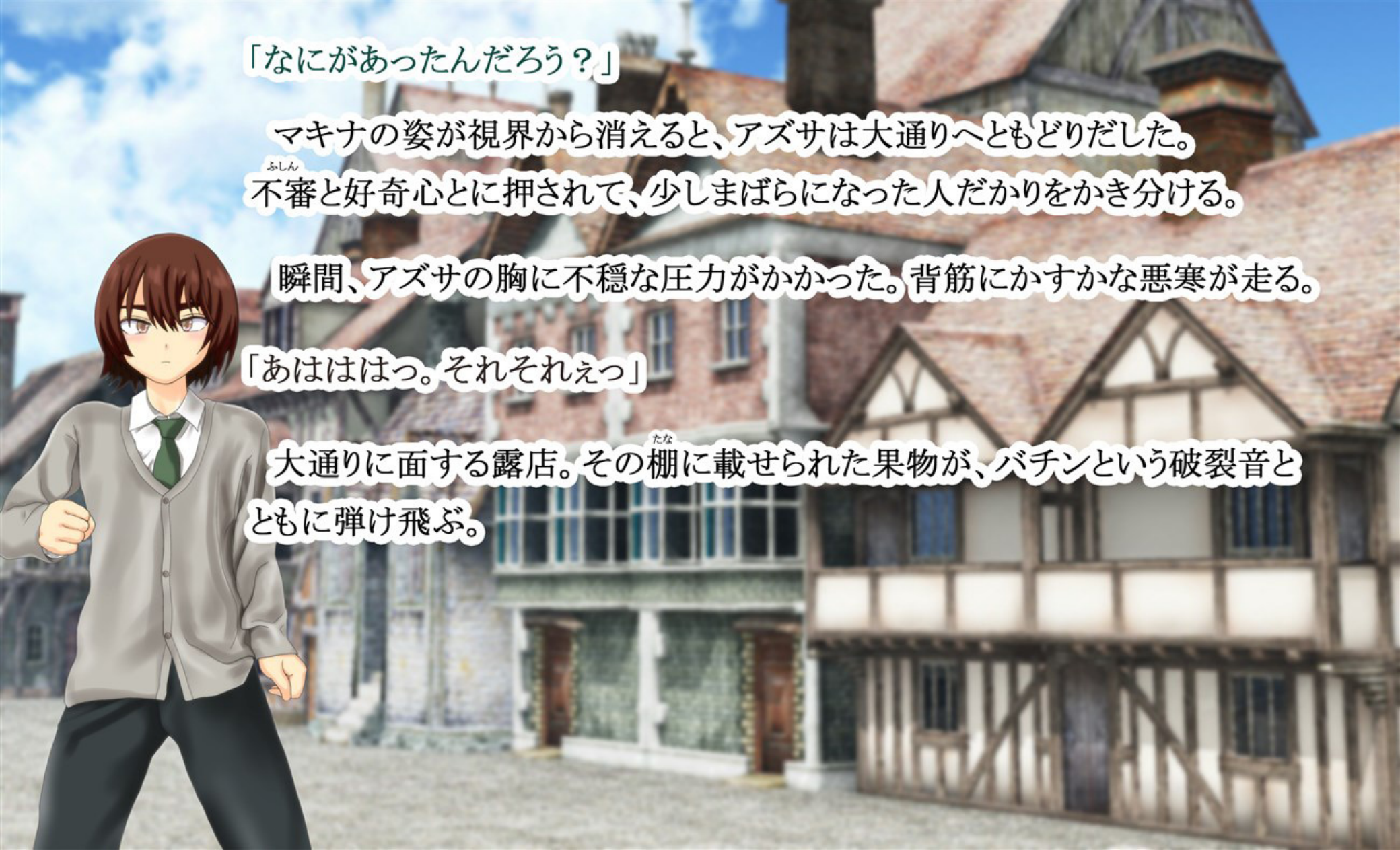
人気(ひとけ)のない横道をしばらく歩くと、アズサの腕をはなす。

「じゃあ、私は用があるから。アズサくんもまっすぐ家に帰りなさいよ」

保護者のように言いつけると、マキナはスタスタと歩き去って行った。

「……」

あっけない幕切れに、アズサは無言でマキナの背中を見送るだけだった。



「なにがあったんだろう？」

マキナの姿が視界から消えると、アズサは大通りへともどりだした。
不審（ふしん）と好奇心とに押されて、少しまばらになった人だかりをかき分ける。

瞬間、アズサの胸に不穏な圧力がかかった。背筋にかすかな悪寒が走る。

「あはははっ。それそれぇっ」

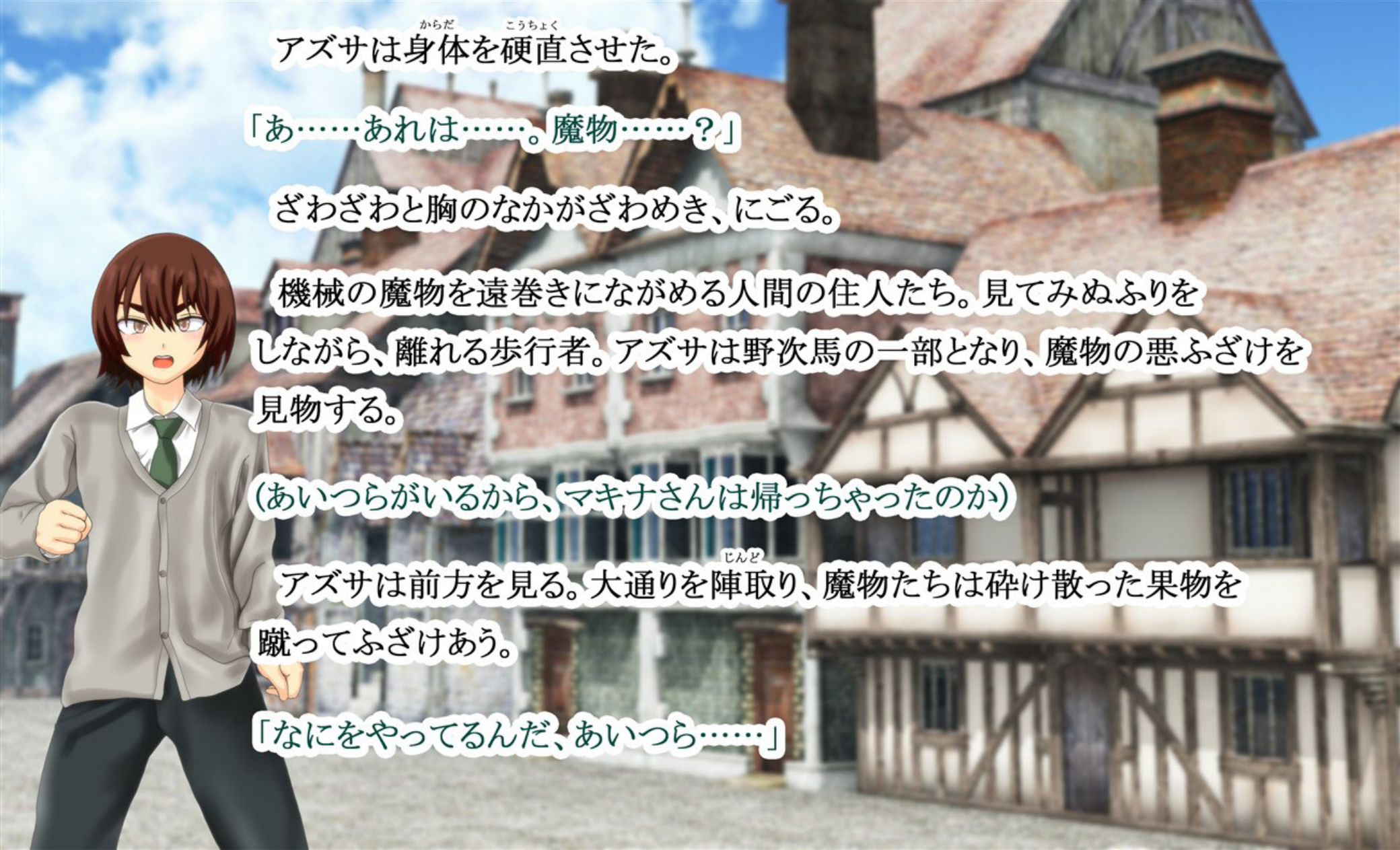
大通りに面する露店。その棚（たな）に載せられた果物が、バチンという破裂音とともに弾け飛ぶ。

「やったー。吹っ飛んだ」

笑い声。銃器から発射された弾は、果物をつぎつぎと砕いてゆく。
金属のボディを持った異様な風体（ふうてい）の少女は、楽しそう銃器を乱射する。

灰色がかった緑に塗装された金属の四肢（しし）をなめらかに動かし、
果物を銃弾で砕いては笑いこけている。その周りには、数名の同じ
機械の生命体がはしゃいでいた。
乳房のついた胴体を見るかぎりでは、その機械人形たちは
すべて女性である。

もっとも、機械に性別があればの話だが。



アズサは身体を硬直させた。

「あ……あれは……。魔物……？」

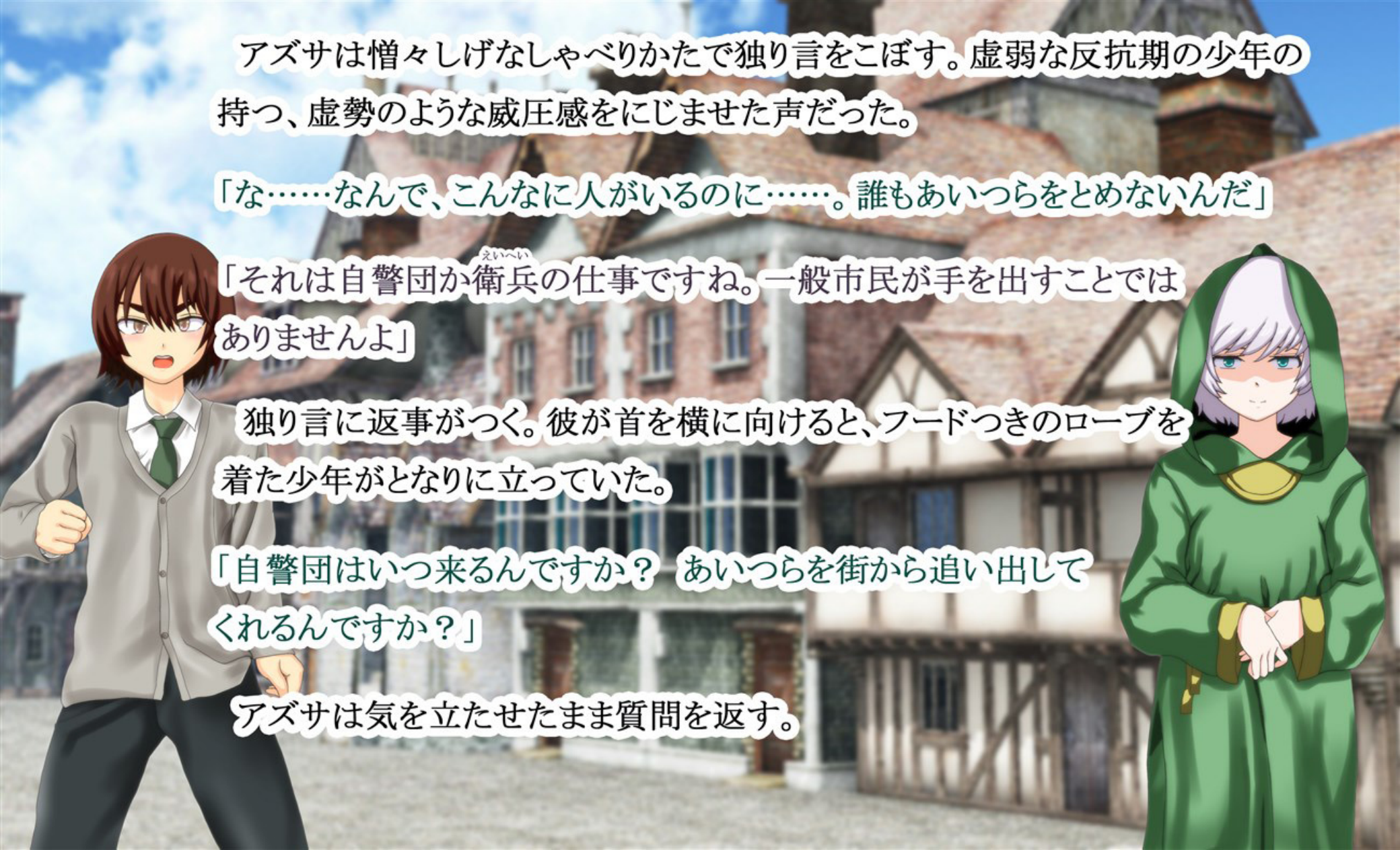
ざわざわと胸のなかがざわめき、にごる。

機械の魔物を遠巻きにながめる人間の住人たち。見てみぬふりをしながら、離れる歩行者。アズサは野次馬の一部となり、魔物の悪ふざけを見物する。

(あいつらがいるから、マキナさんは帰っちゃったのか)

アズサは前方を見る。大通りを陣取り、魔物たちは砕け散った果物を蹴ってふざけあう。

「なにをやってるんだ、あいつら……」



アズサは憎々しげなしゃべりかたで独り言をこぼす。虚弱な反抗期の少年の持つ、虚勢のような威圧感をにじませた声だった。

「な……なんで、こんなに人がいるのに……。誰もあいつらをとめないんだ」

「それは自警団か衛兵（えいへい）の仕事ですね。一般市民が手を出すことではありませんよ」

独り言に返事がつく。彼が首を横に向けると、フードつきのローブを着た少年がとなりに立っていた。

「自警団はいつ来るんですか？　あいつらを街から追い出してくれるんですか？」

アズサは気を立たせたまま質問を返す。

「さあ……ぼくには分かりかねますが。いずれ到着すれば、法に基(もと)づいてなんらかの対処をしてくれることでしょう」

「本当に？　いつも街のどこかでああやって魔物が暴れているけれど、対処なんてしているの？」

「魔物も、武装した人間を見るとすぐに散ってしまいますしね。対処といっても難しい問題ですね。自警団も、むやみと衝突することはしないのでしょう。魔物は、手ごわいですからね」

「……じゃあ、自警団はなんのために存在しているのでしょうか」

「いろいろと優先すべき仕事があるのでしょう。魔物のバカ騒ぎなんて、近よらなければそれほどたいしたことでもありませんよ。チンピラの集会みたいなものです。小さな問題です」

「……」
アズサは気の抜けたような顔になると、無言で大通りを引き返した。

「せっかくマキナさんと遊べると思ったのになぁ……」

ぼんやりと、肩を落として道を歩く。

先ほどの大通りの喧騒（けんそう）が、頭の中で浮かんでは消え、また浮かぶ。

（あんな魔物なんか、ボコボコにしてやればいいのに……）

願望だけの非現実的な発想で、己をなぐさめる。中天に輝く太陽が、ときおりさえぎる雲に光を弱めた。

「天の刻来たり！」

とつじょ、空から声が降る。
アズサがうつむいた顔を上げると、目の前で、宙に浮いた金髪の少年がふわりと着地した。
彼は白い布地を身体にまとい、ヒモで胴部を締めている。
古代人のような、浮世離れをした格好だった。ラビエルである。

「今の世の中あやまちばかり。神の義、天より降り来て、人知の規律を裁断す。善と悪とを立て分けて、魔族も世俗も打ち砕く。この地、イリアスルード。本日より天使がちょっかいをかけるぞよ。女子の便器に天下を取らせますぞ！」

「……？」

いきなりの理解不能な演説に、アズサはとまどい、棒立ちのままになった。

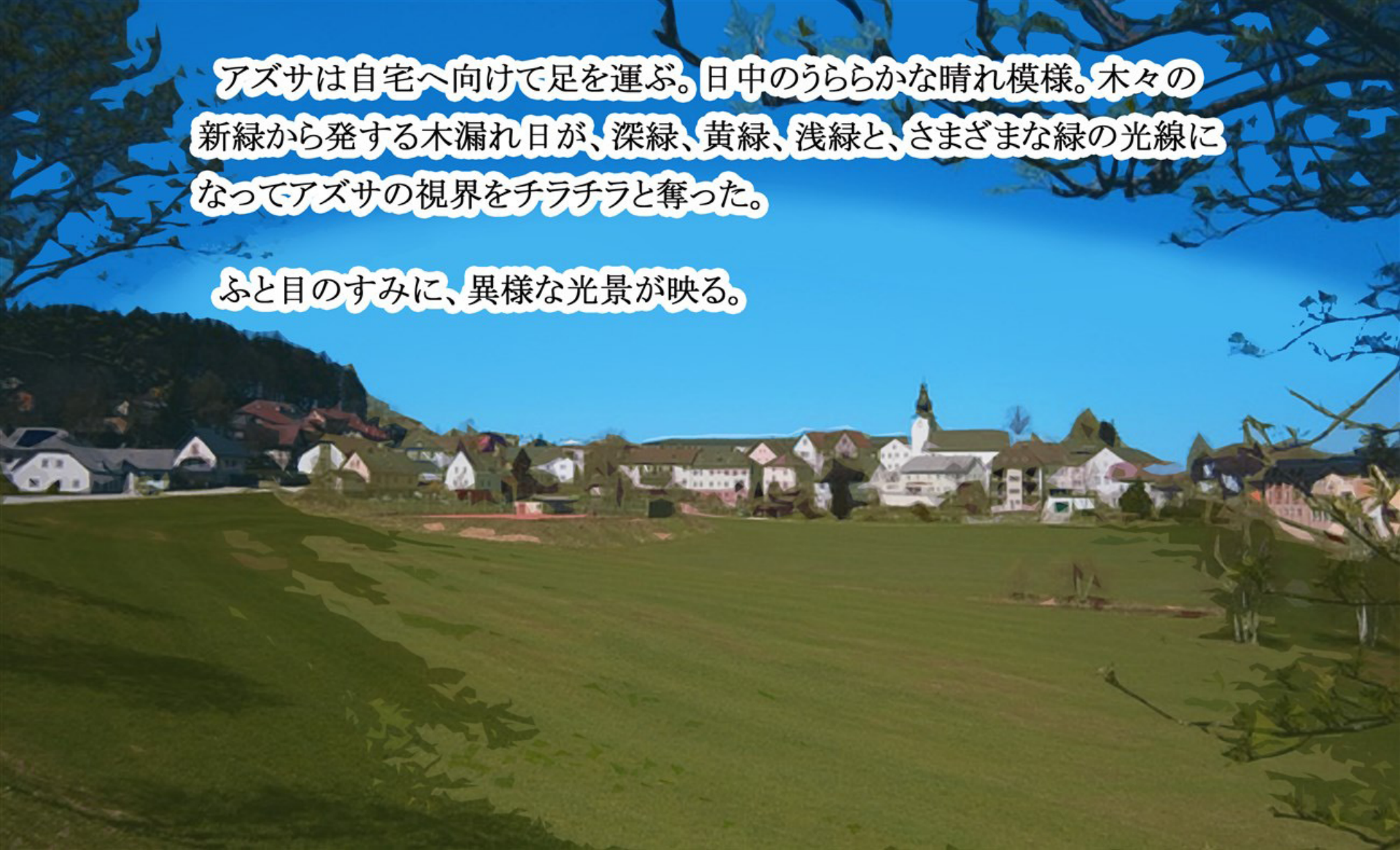
「さればこのたびの勇者殿の御働き。旅もなく剣もなく誉れもなし。負け戦につぐ負け戦。恥につぐ恥の上塗り。伝説にも王にもなれぬ小市民。無理解、嘲笑、面罵の褒美をうず高くいただくなり。しかして最後にとどめの一厘あらわれて、掟もイロハもひっくり返し、世界中をギャフンと言わせますぞ！」

（わ……危ない人だ。目を合わせちゃいけない）

アズサは目線を反らすと、足早にラビエルの元から去って行った。

「三千世界一度に開く……。あ、あれ？」
ラビエルは気がつくと、虚空に向かって演説をしている。

「こ、こらー。待ちなさい少年！」



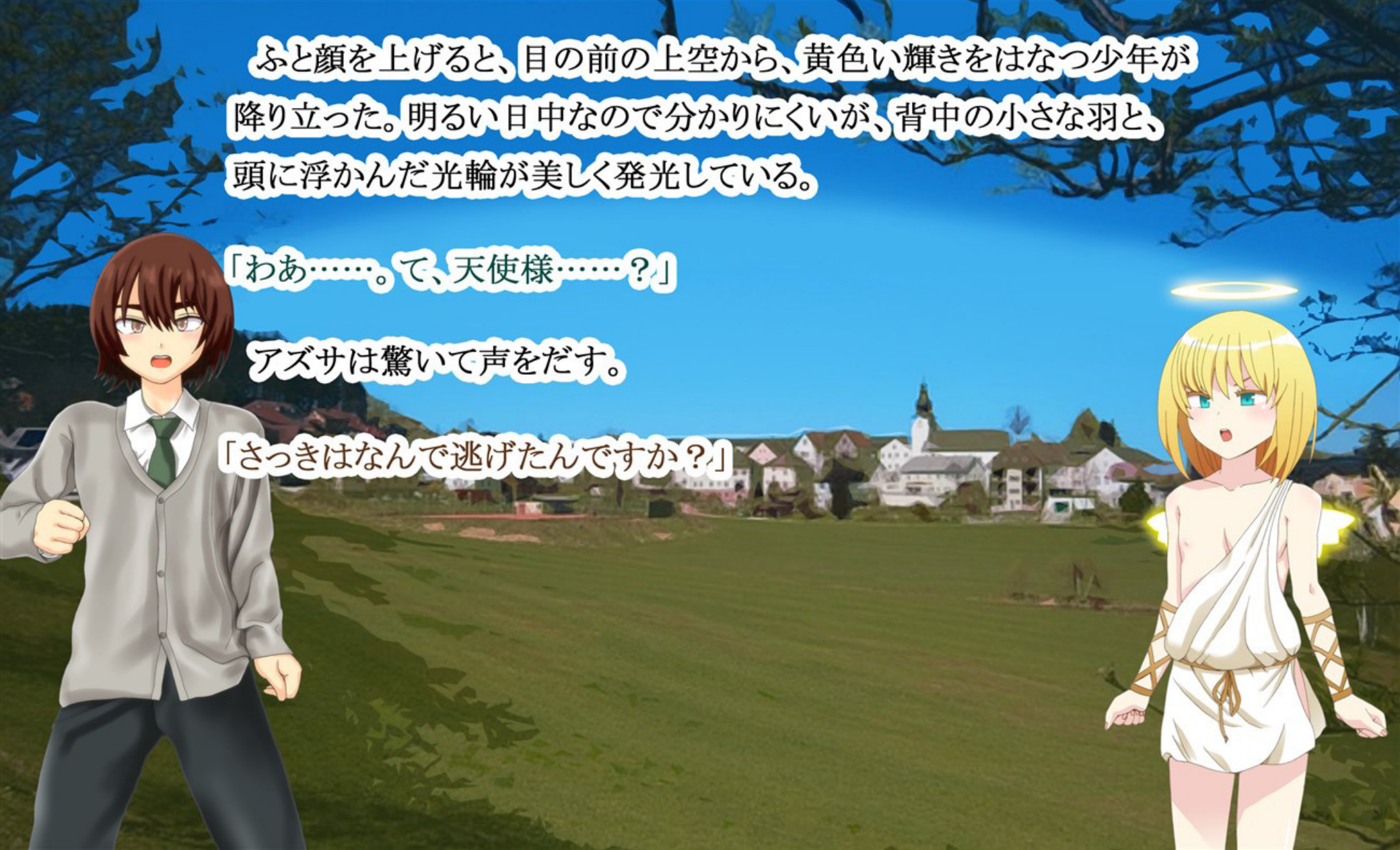
アズサは自宅へ向けて足を運ぶ。日中のうららかな晴れ模様。木々の新緑から発する木漏れ日が、深緑、黄緑、浅緑と、さまざまな緑の光線になってアズサの視界をチラチラと奪った。

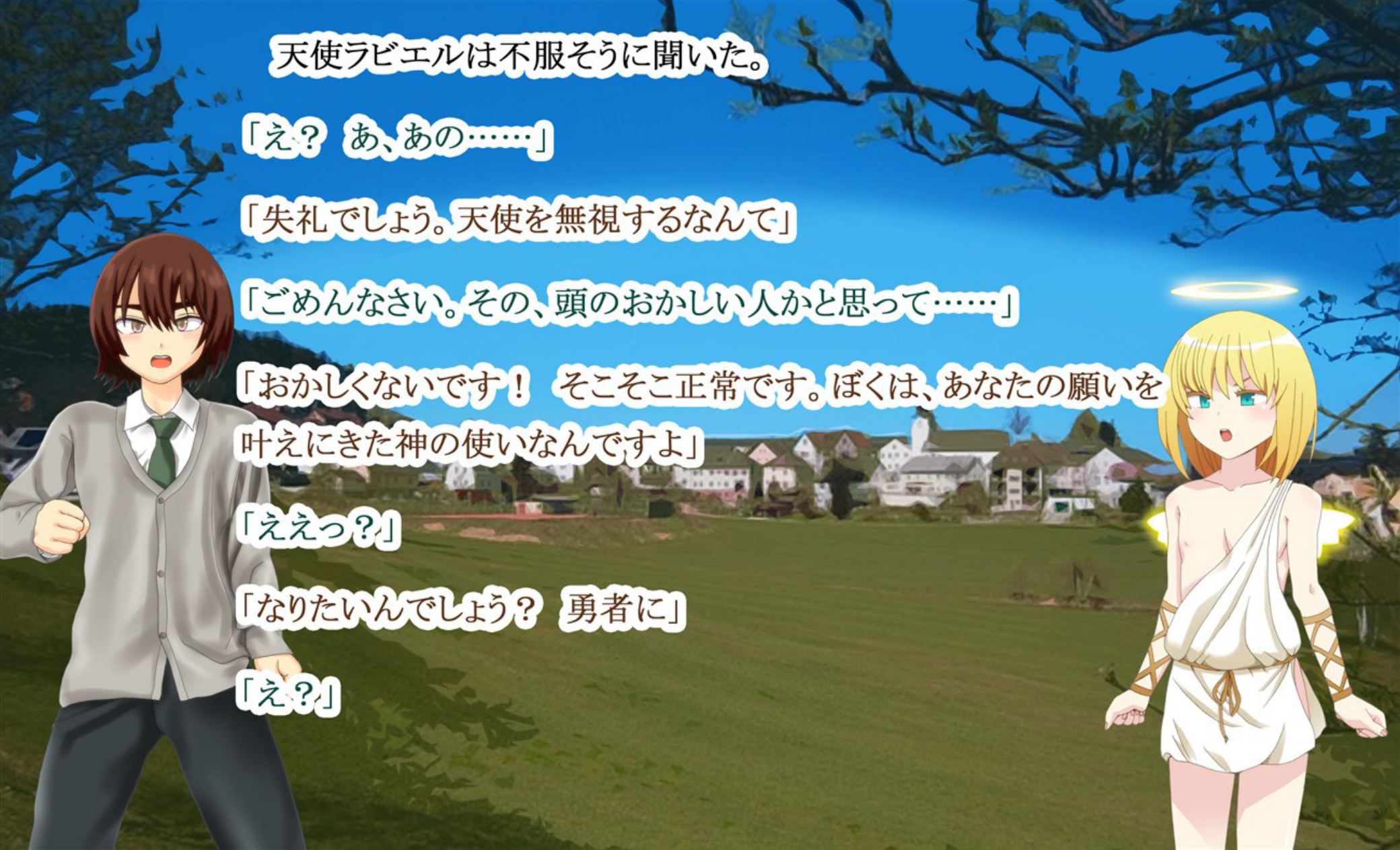
ふと目のすみに、異様な光景が映る。

巨大な、ミミズともナメクジともつかぬ触手が、うねうねと蠕動(ぜんどう)して道をふさいでいる。
「うわ……？」
アズサは思わずあとずさった。
（また魔物だ）

道に散らばったいくつもの触手は、一人の奇怪な女性の腕からこぼれ落ちたものだった。八股ほどに分かれた長い腕が、日光を反射してヌラヌラと輝いている。
アズサは立ちどまったまま思案する。
(困ったな。回り道をしようか……。べつにあんな奴、怖くないけど……。トラブルになっても嫌だしな)
彼は道を引き返した。

「なんだか、魔物をよく見るなぁ」
アズサはつまらなさそうな顔で、ゆっくりと歩く。
「まったく、なんでぼくが気を使わなきゃいけないんだ……」
道端(みちばた)でエサを探す小鳥が、彼の靴音から足早に逃げだし、飛び立った。


ふと顔を上げると、目の前の上空から、黄色い輝きをはなつ少年が降り立った。明るい日中なので分かりにくいが、背中の小さな羽と、頭に浮かんだ光輪が美しく発光している。
「わあ……。て、天使様……？」
アズサは驚いて声をだす。
「さっきはなんで逃げたんですか？」


天使ラビエルは不服そうに聞いた。
「え？　あ、あの……」
「失礼でしょう。天使を無視するなんて」
「ごめんなさい。その、頭のおかしい人かと思って……」
「おかしくないです！　そこそこ正常です。ぼくは、あなたの願いを叶えにきた神の使いなんですよ」
「ええっ？」
「なりたいんでしょう？　勇者に」
「え？」

「恥ずかしがらなくてもいいんですよ。ぼくはあなたのことを知っているんです。あなたこそ、この街で唯一、天の秘宝を授けるに値する者。すなわち、いかなる強敵にも立ち向かう不屈の正義と、何者にも穢されない純真無垢な心を持つ少年……！」

「いかなる強敵にも立ち向かう不屈の正義と、何者にも穢されない純真無垢な心を持つ少年……。自信ないなぁ、ぼく……」

アズサは力なく苦笑いをする。

「なーにを言ってるんですか。あなたの心の奥底はお見通しなんですよ。この日を待っていたんでしょう？　さあ、受け取りなさい。天の秘宝を」

ラビエルは懐から、楕円形に輝く光を取りだす。

「その働きは神韻縹渺にして玄妙深絶！　終窮究竟の三極具がひとつ、天正裁之真澄鏡！」

「えーと……、なんですか？」

「天正裁之真澄鏡！」

ラビエルは連呼する。

「この霊玉をあなたの魂に与えて、一分待てばあら簡単。即席勇者のできあがり。なぜならこの鏡は、あなたの心の奥底にある願いを映しだし、顕現化して、たちまち叶えてしまうからです」

「……」

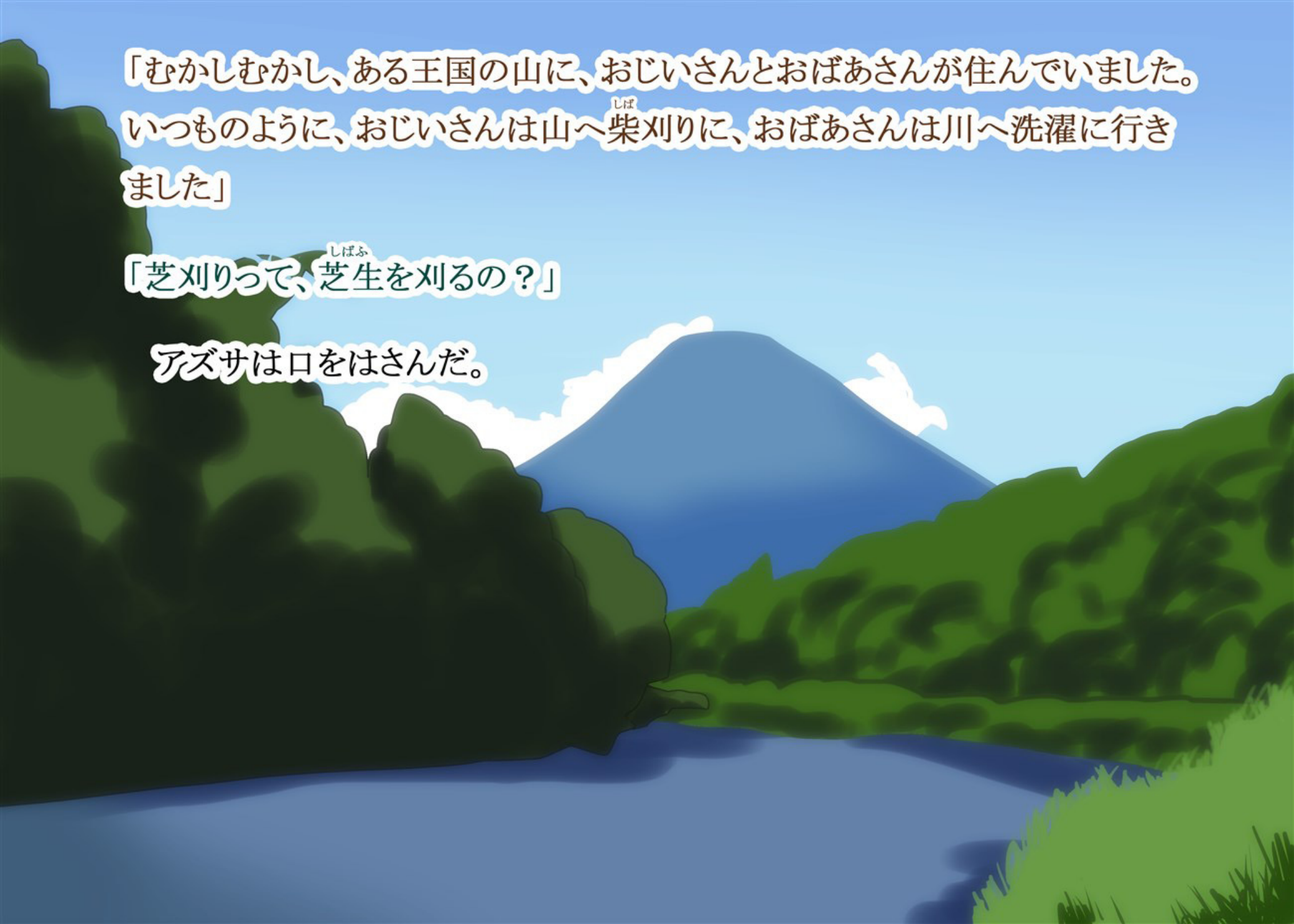
アズサは信じられないといった面持ちでパチパチとまばたきをする。

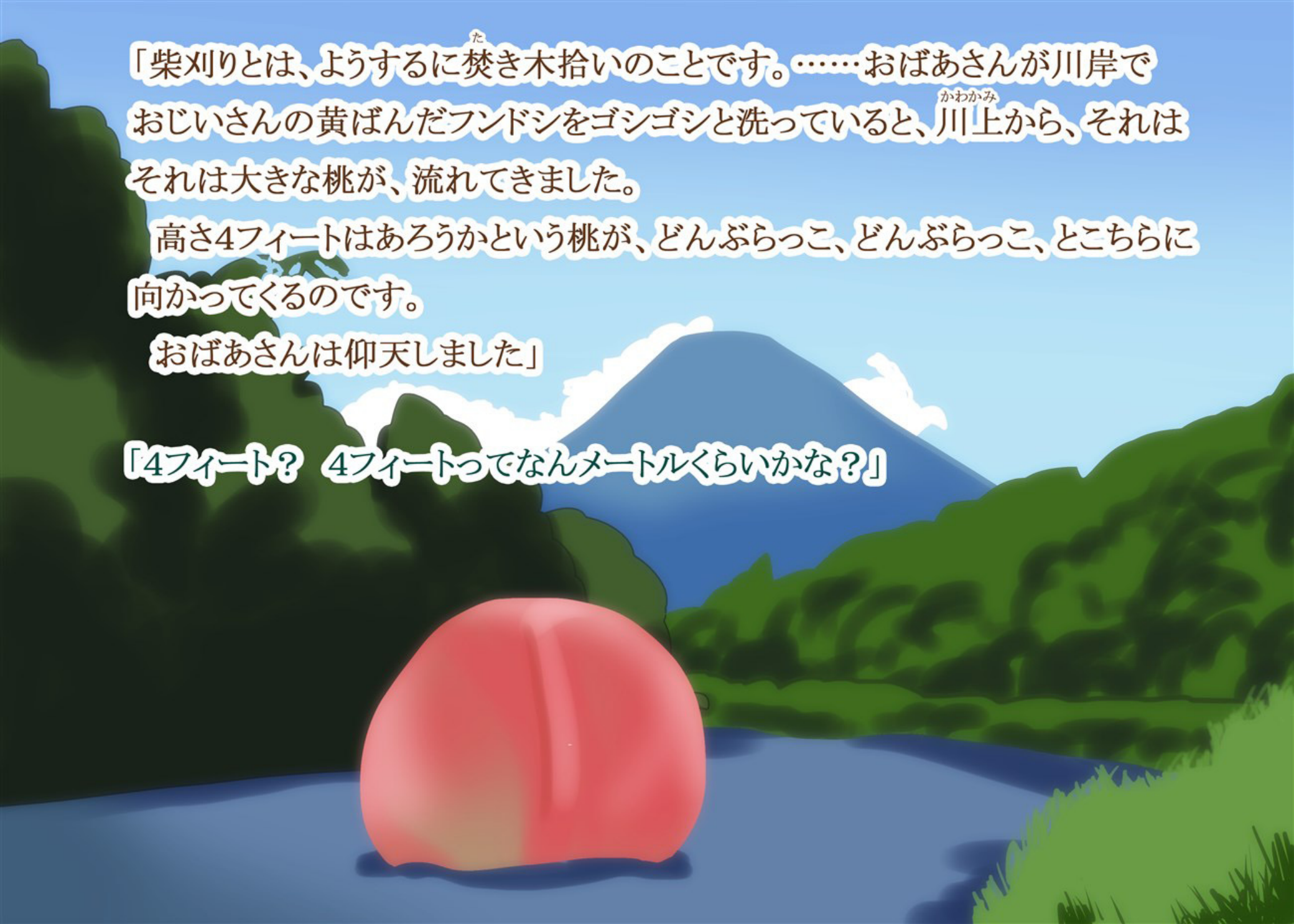
「さあ、受け取りなさい。そしてあなたの心の赴(おもむ)くままに願いを実現させなさい！
……あ。その前に、この鏡の説明をさせていただきます」

「はあ……？」

「んー。なんて伝えればいいのか……。じゃあ、ひとつ昔話を話しましょう。よく聞いてくださいね」

ラビエルは話し始めた。アズサはこの不思議な少年の話を、興味深げに聞く。


「むかしむかし、ある王国の山に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。いつものように、おじいさんは山へ柴(しば)刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました」
「芝刈りって、芝生(しばふ)を刈るの？」
アズサは口をはさんだ。



「柴刈りとは、ようするに焚(た)き木拾いのことです。……おばあさんが川岸でおじいさんの黄ばんだフンドシをゴシゴシと洗っていると、川上(かわかみ)から、それはそれは大きな桃が、流れてきました。

高さ4フィートはあろうかという桃が、どんぶらっこ、どんぶらっこ、とこちらに向かってくるのです。

おばあさんは仰天しました」

「4フィート？　4フィートってなんメートルくらいかな？」

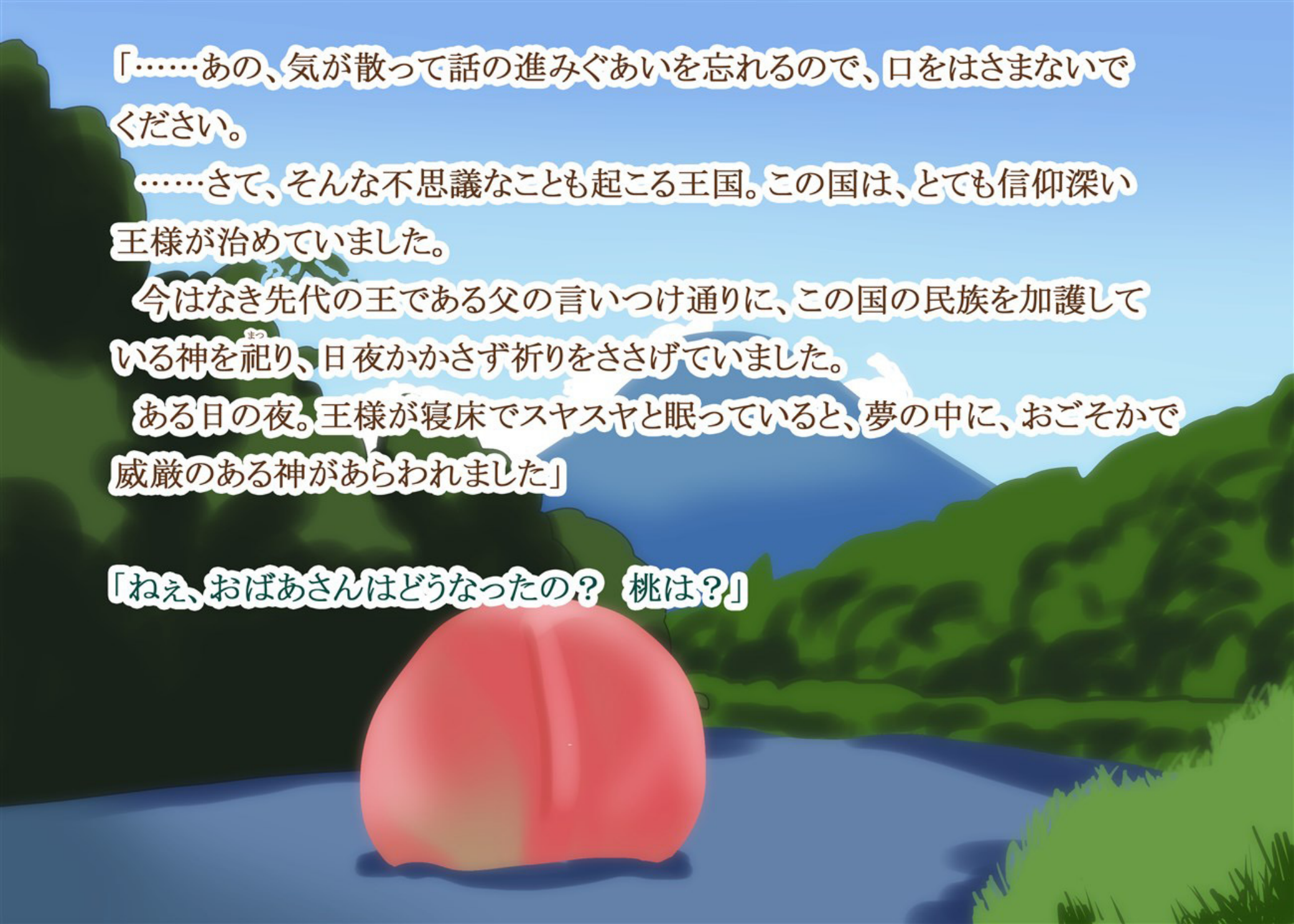
「……あの、気が散って話の進みぐあいを忘れるので、口をはさまないでください。

……さて、そんな不思議なことも起こる王国。この国は、とても信仰深い王様が治めていました。

今はなき先代の王である父の言いつけ通りに、この国の民族を加護している神を祀(まつ)り、日夜かかさず祈りをささげていました。

ある日の夜。王様が寝床でスヤスヤと眠っていると、夢の中に、おごそかで威厳のある神があらわれました」

「ねぇ、おばあさんはどうなったの？　桃は？」



「だから、口をはさむのはやめてください。神は言いました。

“王よ。汝(なんじ)は父の言いつけ通りに、我(われ)を祀り、祈りを怠らなかった。
そこで、我が祈りを聴きとどけている証しとして、汝の願いをひとつだけ、
叶えてやろうと思う。さあ、なんでも申すがよい”
王様は夢の中で畏(おそ)れかしこまり、神に聞きました。

“神よ。それは本当でしょうか？　本当になにを願ってもよいの
ですか？”
神は答えました。
“なんでも申すがよい。たちまちのうちに叶えてやろう”」

「あ、分かった！　王様が、願いを叶える数を増やして欲しいっていう、
願い言うか、神様の変わりに私を神にして欲しいとか願って、けっきょく
怒られるんでしょ」

「あーもう！　口をはさまないでって言ってるでしょーが！」

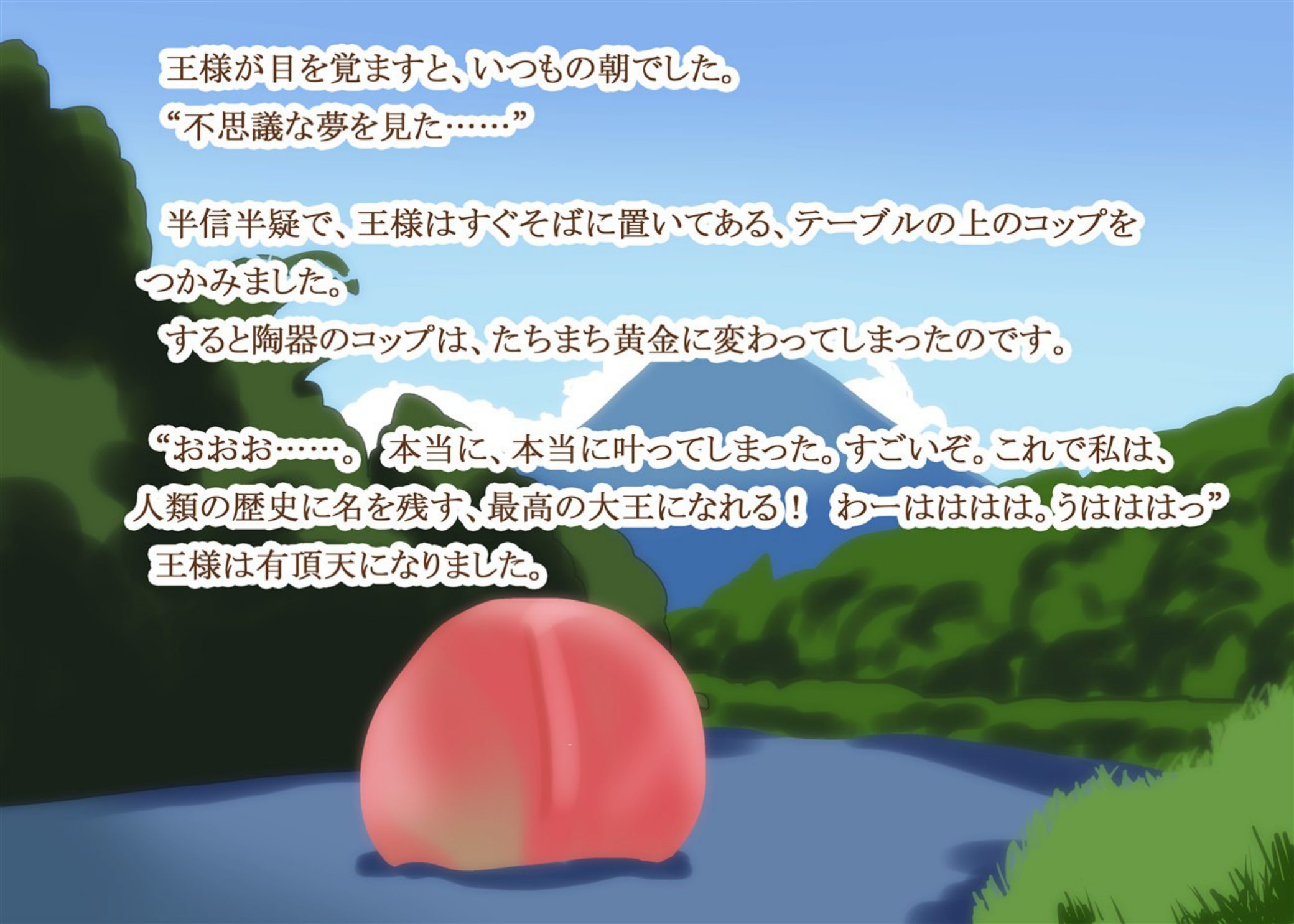
「しゅん……」

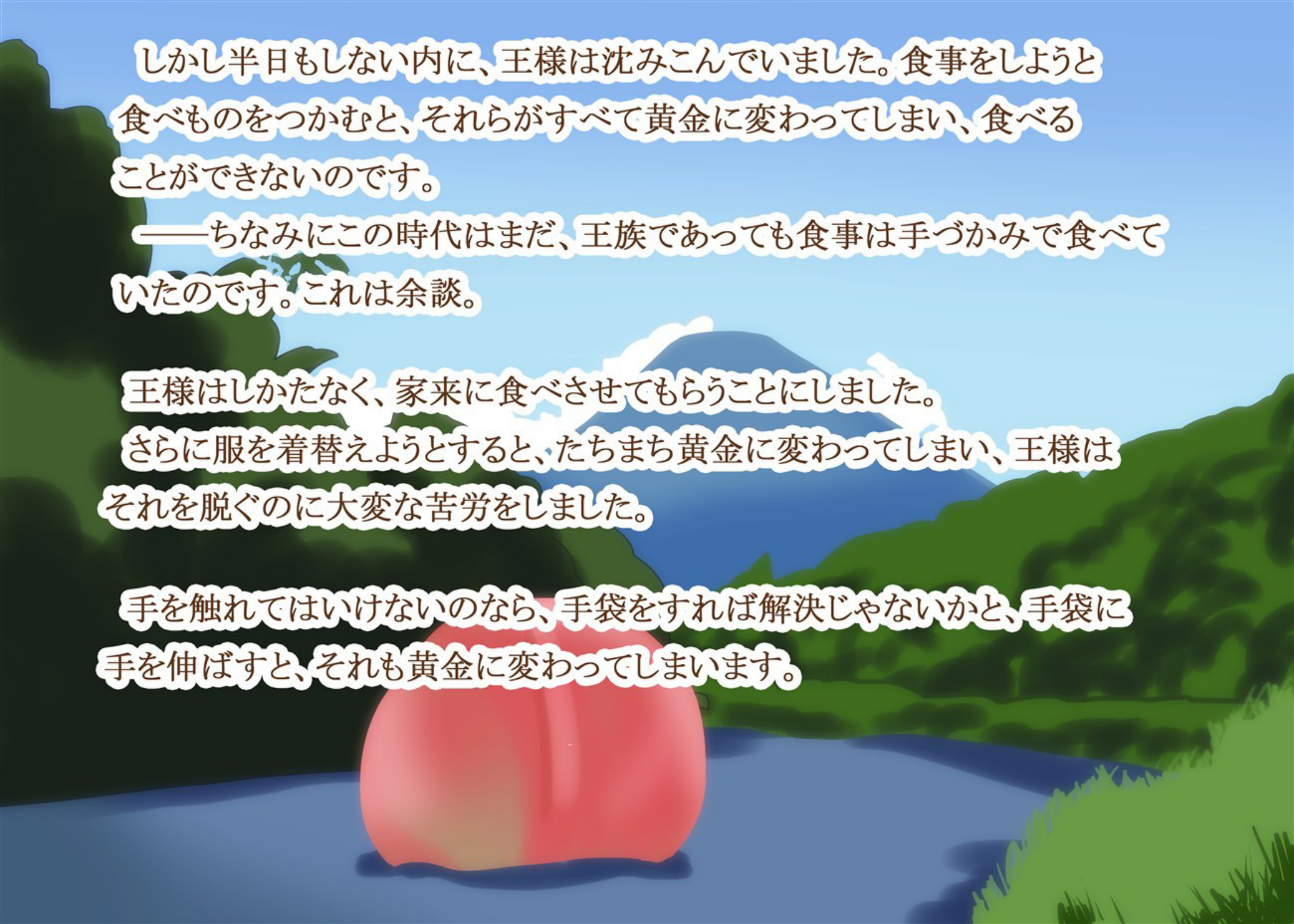
「王様は言いました。
“それならば神よ。私の手が触れるものことごとくが、黄金(おうごん)に変わるようにし給(たま)え”

神は聞き返します。
“うむ。いいだろう。本当にその願いでよいのだな？”

“ええ、それはもう。神よ、あなたのお力を疑うことはありませんが、ほ、本当に叶いますかね？”

“たやすいことだ”
神は消えていきました。


王様が目を覚ますと、いつもの朝でした。
“不思議な夢を見た……”
半信半疑で、王様はすぐそばに置いてある、テーブルの上のコップをつかみました。
すると陶器のコップは、たちまち黄金に変わってしまったのです。
“おおお……。本当に、本当に叶ってしまった。すごいぞ。これで私は、人類の歴史に名を残す、最高の大王になれる！ わーはははは。うはははっ”
王様は有頂天になりました。



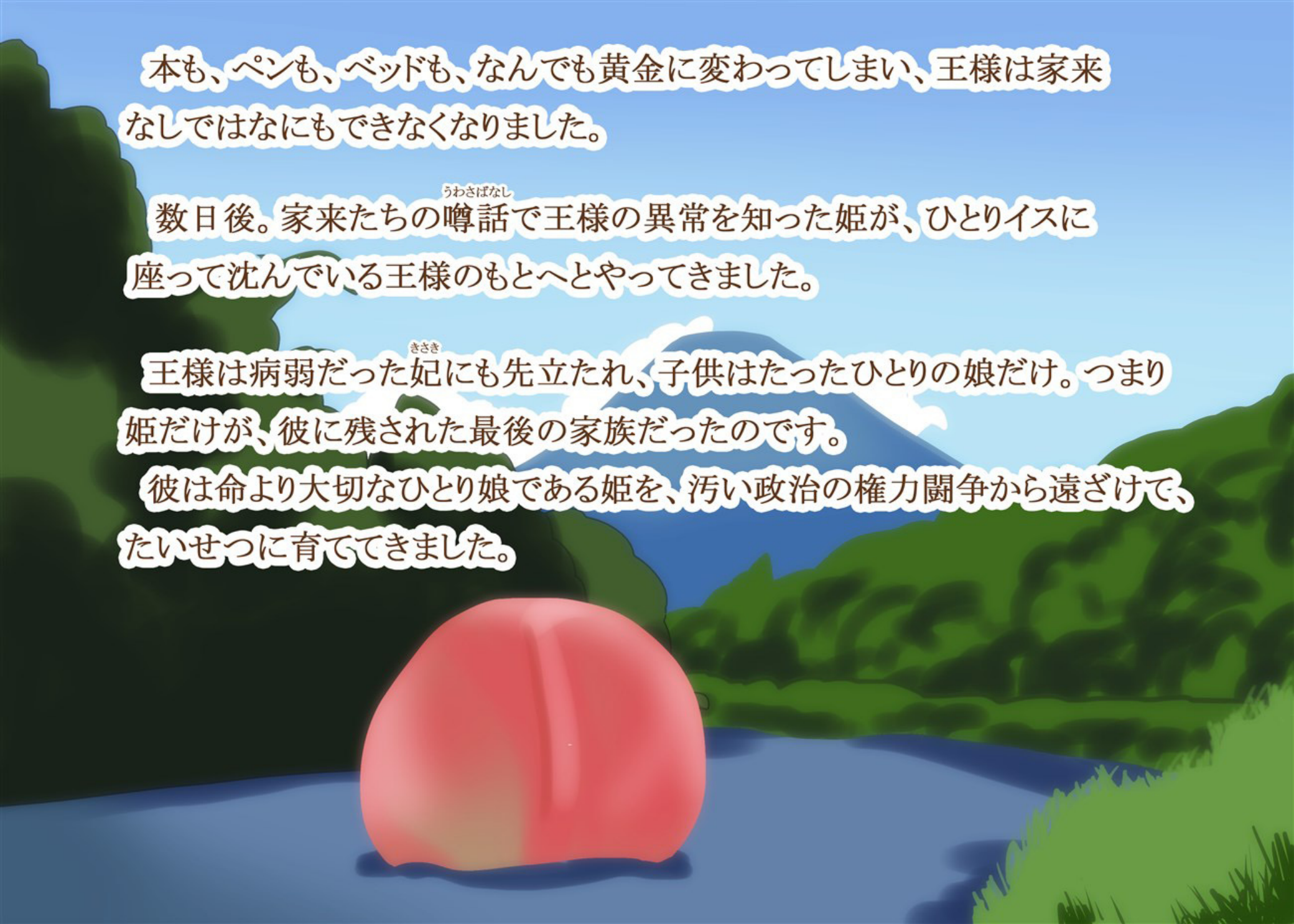
しかし半日もしない内に、王様は沈みこんでいました。食事をしようと食べものをつかむと、それらがすべて黄金に変わってしまい、食べることができないのです。

――ちなみにこの時代はまだ、王族であっても食事は手づかみで食べていたのです。これは余談。

王様はしかたなく、家来に食べさせてもらうことにしました。

さらに服を着替えようとすると、たちまち黄金に変わってしまい、王様はそれを脱ぐのに大変な苦労をしました。

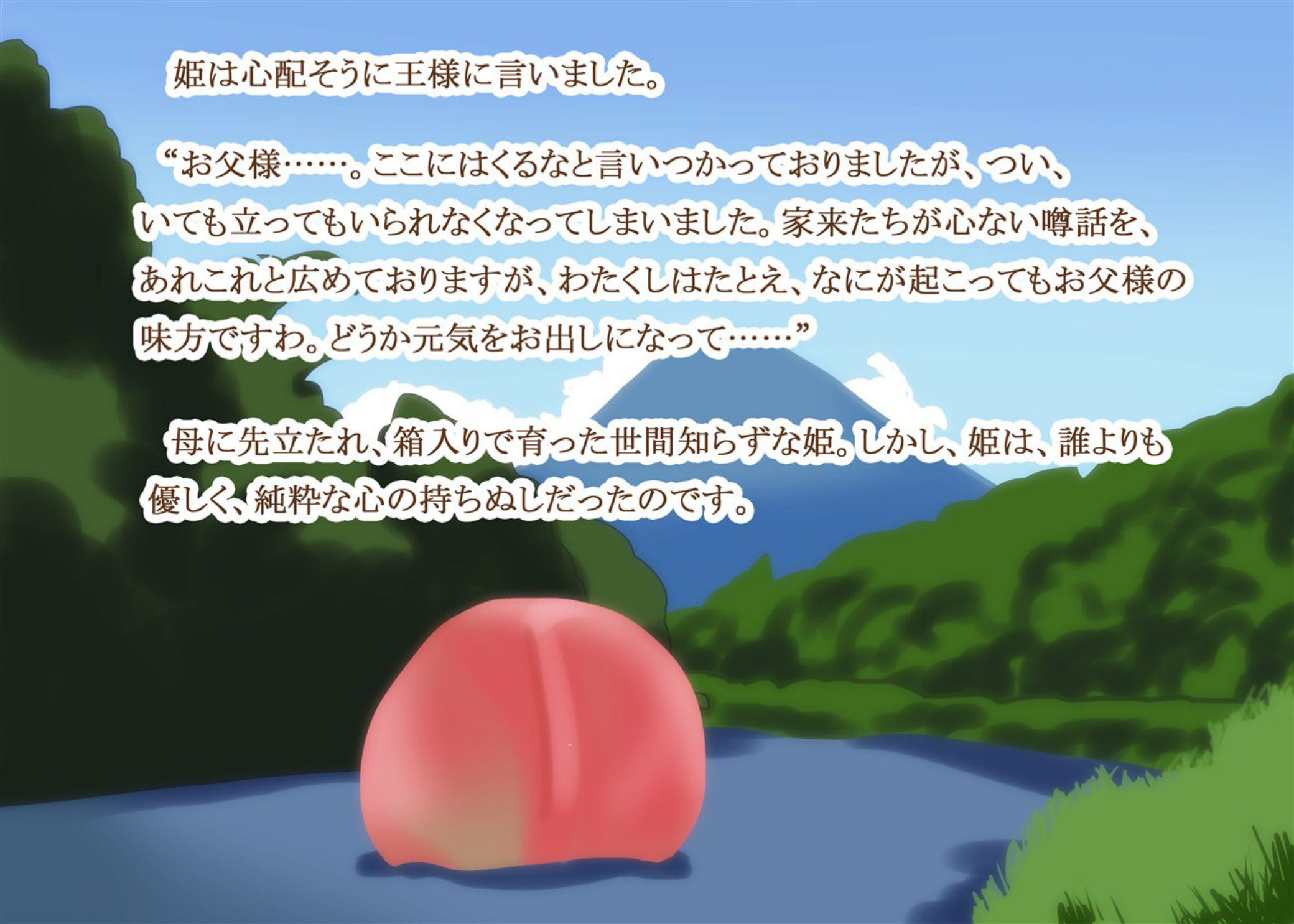
手を触れてはいけないのなら、手袋をすれば解決じゃないかと、手袋に手を伸ばすと、それも黄金に変わってしまいます。



本も、ペンも、ベッドも、なんでも黄金に変わってしまい、王様は家来なしではなにもできなくなりました。

数日後。家来たちの噂話(うわさばなし)で王様の異常を知った姫が、ひとりイスに座って沈んでいる王様のもとへとやってきました。

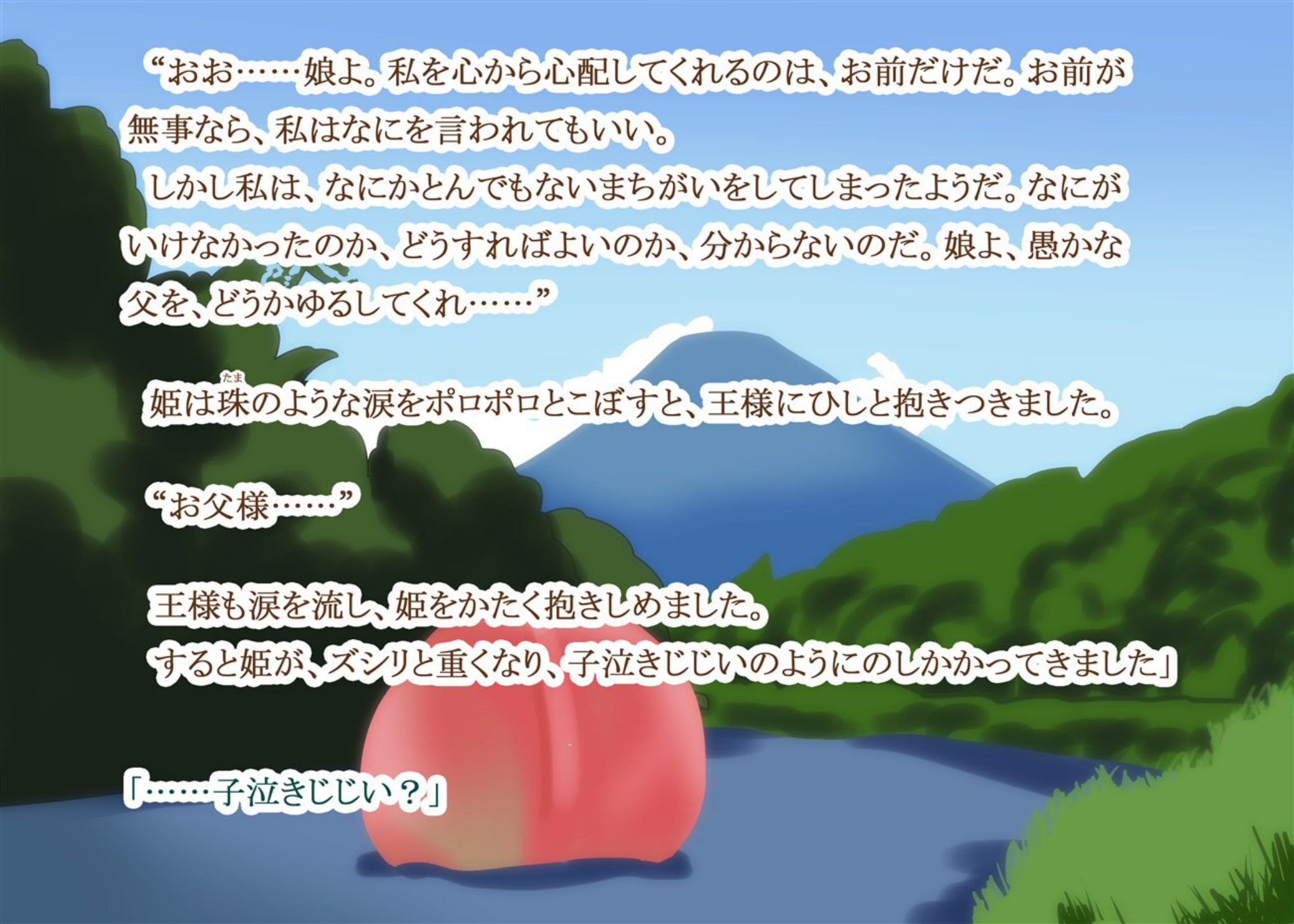
王様は病弱だった妃(きさき)にも先立たれ、子供はたったひとりの娘だけ。つまり姫だけが、彼に残された最後の家族だったのです。
彼は命より大切なひとり娘である姫を、汚い政治の権力闘争から遠ざけて、たいせつに育ててきました。



姫は心配そうに王様に言いました。

“お父様……。ここにはくるなと言いつかっておりましたが、つい、いても立ってもいられなくなってしまいました。家来たちが心ない噂話を、あれこれと広めておりますが、わたくしはたとえ、なにが起こってもお父様の味方ですわ。どうか元気をお出しになって……”

母に先立たれ、箱入りで育った世間知らずな姫。しかし、姫は、誰よりも優しく、純粋な心の持ちぬしだったのです。



“おお……娘よ。私を心から心配してくれるのは、お前だけだ。お前が無事なら、私はなにを言われてもいい。
しかし私は、なにかとんでもないまちがいをしてしまったようだ。なにがいけなかったのか、どうすればよいのか、分からないのだ。娘よ、愚かな父を、どうかゆるしてくれ……”

姫は珠(たま)のような涙をポロポロとこぼすと、王様にひしと抱きつきました。

“お父様……”

王様も涙を流し、姫をかたく抱きしめました。
すると姫が、ズシリと重くなり、子泣きじじいのようにのしかかってきました」

「……子泣きじじい？」

「なんと王様は、あろうことか命よりも大切なひとり娘である姫を、黄金の像に変えてしまったのです。

“あああ！　なんということだ！　命より大切な、私の娘が。たったひとりの家族が……。う、うわあああああああッ”

王様は狂ったように暴れだし、カーテンを裂き、イスを蹴飛ばし、わめき続けます。
しかし家来たちは、自分が金（きん）の像にされることを恐れ、誰ひとりとして王様に近よろうとはしませんでした。

王様はトチ狂ったまま衰弱し、一週間もしない内に死んでしまいましたとさ。めでたし、めでたし」

「ぜんぜんめでたくないよ！」

「まあ、こんな昔話ですが。この王様は今のあなたでもあるのです」

「……え？」

「この天正裁之真澄鏡は、あなたの心の奥にあるたったひとつの願いを叶えてくれます。あなたの人生は一変するでしょう。しかしそれが、あなたの幸せにつながるかどうかまでは、ぼくにも分かりません。
……それでもあなたは、この力を受け取る勇気がありますか？」

「いえ、ありません。お断りします」

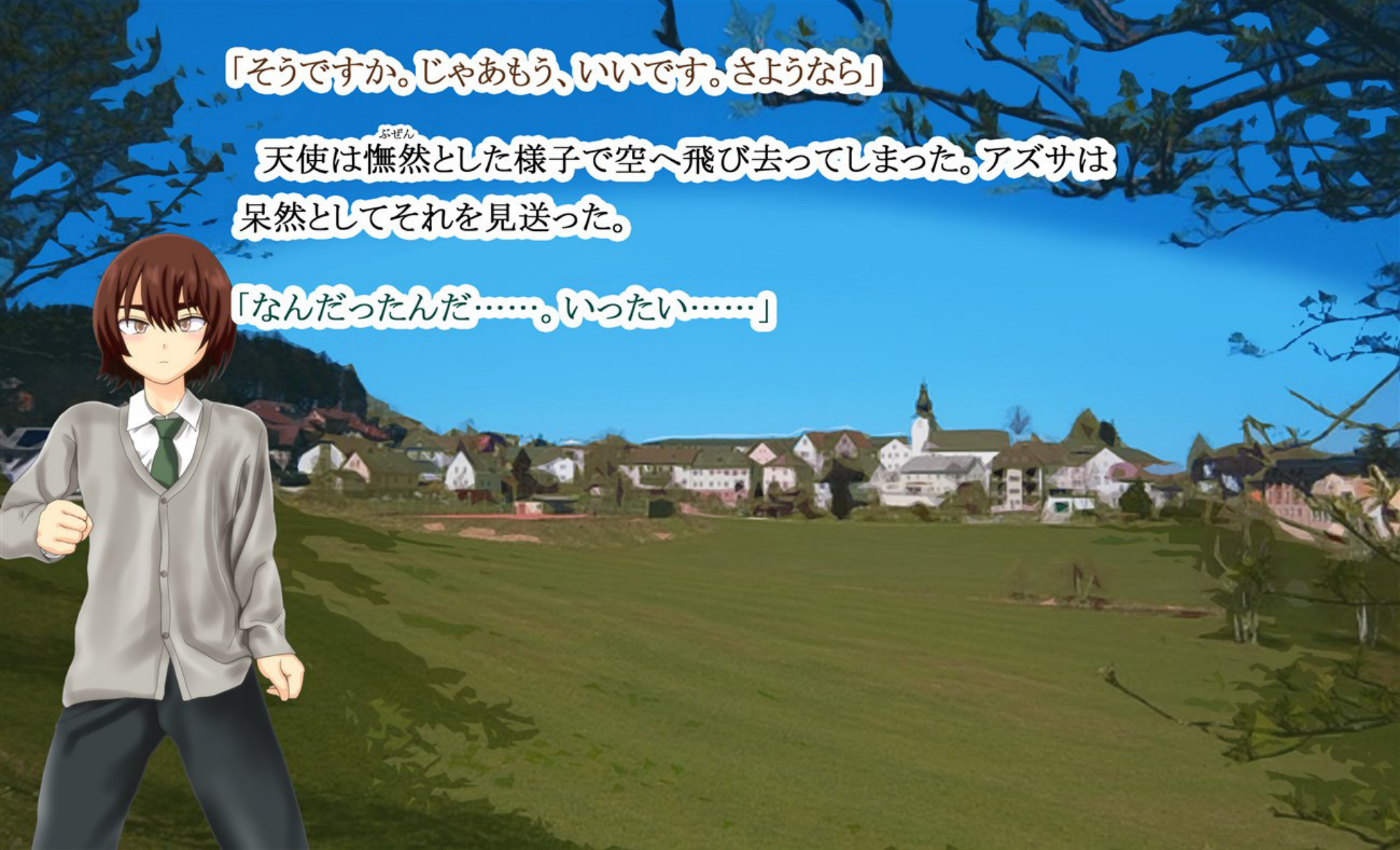
「だはーっ」
ラビエルはずっこけた。
「あ、あのぅ……」

「な、なんで。なんでですか！　それでもハイと言うのが勇者でしょう。
あなたは臆病者の小市民です」

「そんなことを言われても……。そんなリスクのある怖いものなんて、
受け取れません。ぼくなんかより、もっとふさわしい人がいるでしょう」

「あなたは天に選ばれた者なんですよ？」

「ぼく、べつに勇者になんてなりたくないし……。ぼくはただ、
安らかに暮らせればそれでいいんです」


「そうですか。じゃあもう、いいです。さようなら」
天使は憮然(ぶぜん)とした様子で空へ飛び去ってしまった。アズサは呆然としてそれを見送った。
「なんだったんだ……。いったい……」

「リムルぅ〜」

木の枝に座りこんでいたリムルが、ラビエルに気づく。

「あ、ラビエル。おかえり。どうだった？」

「断られちゃったよ。勇者になんかなりたくないって」

「あら。どうせあんたがくだらないことばかり言うから、信用されなかったんでしょ」

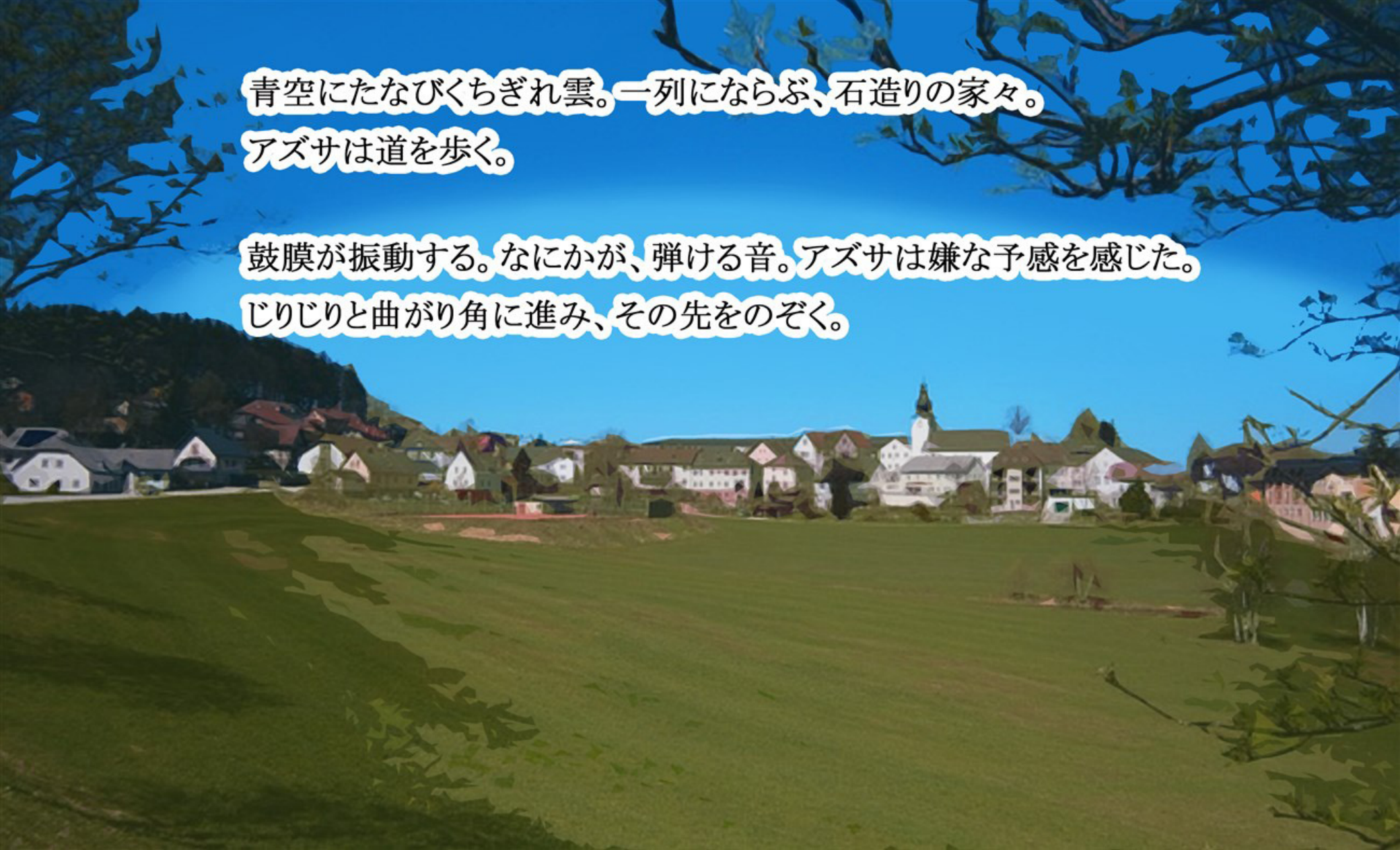
「そんなことないってば。ちゃんと説明したけど、キッパリと断られちゃった」

「なんでよ？」

「安らかに暮らしたいんだってさ」

「ふーん……？　まあ、あっちがそう言うのなら、しょうがないわねぇ」

「これからどうしようか」
ラビエルはリムルにうかがう。
「そうねえ……。このまま帰るのもあっけないし、人間の街でも観光しましょうか」
「え？　ぼくたち二人が歩くと目立つよ」
「ちょっとながめるだけよ。いいじゃない」



青空にたなびくちぎれ雲。一列にならぶ、石造りの家々。
アズサは道を歩く。

鼓膜が振動する。なにかが、弾ける音。アズサは嫌な予感を感じた。
じりじりと曲がり角に進み、その先をのぞく。

「そらそらぁ」

大通りで暴れていた機械の魔物。その一味が、こちらに移っていた。
レンガの壁に向かって、銃弾を撃ちこんでいる。

「あ、あいつら……」

アズサは総毛立った。

「よりによって、ぼくの家の前の壁を……」

弾丸が壁に当たるたびに、レンガが音を立てて砕(くだ)け、弾(はじ)け、
道に転がる。

「あはははは。弱っちいなあ。この壁は。地震がきたら一発で潰れるぞ」
「よーし。耐震実験をしてやろう」
魔物たちは壁を殴り始める。

「なにをやっているんだ、自警団は。なんでこないんだ。だれか通報しろよ」

「きて欲しいのなら、あなたが通報すればよいでしょう」

アズサの独り言に、返事がくる。大通りにいた、ローブ姿の少年だった。

「……え？　でも、ここから自警団の詰所（つめしょ）は遠いですよ。ぼくがそこまで行って、通報して、自警団がくるまで、魔物がここにいるとは思えない。そんなことをするのは、ちょっと」

「そうかもしれませんね」

「……みんな、見て見ぬふりだ。ふだんはえらそうに道徳を語っている、神官や教師だって。なにもしない。この街は、腐（ふ）っている。腑抜けばかりだ」

「みんながなにもしないなら、あなたがなにかをすればよいのでは？」

「でも、ぼくには、資格がありません。自警団でも衛兵でもないし。どのみちそんな奴ら、なんの役にも立たない。だから、ぼくが自警団員になりたいとも思わない」

「そうですか」

「……あなたこそ、いつも見ているだけですか。くやしくないんですか」

「ぼくは旅の吟遊(ぎんゆう)詩人。住人ではない流れ者には、この有様(ありさま)も、いわば風景にしかすぎません」

「住人にとっても、風景でしょうね。この街の人間は、ダメだ……」

「住人がダメなら、あなたが立ち上がればよいでしょう。あなたも住人です」

「ぼくは、資格がない。乱闘なんてしたら、捕まってしまうのはぼくだ。みんなから、白い目で見られる。それに、ぼくひとりじゃ、勝てない……」

アズサはコブシを固める。

「完璧な街、完全な住人なんて、ありえませんよ。あなたは、力もないのに、多くを望みすぎています。完璧な理想など、実際の生活にはありえません。それでも、みんなそれなりに暮らしています」

「魔物にも勝てない。街の法にも勝てない。仲間もいない。それにぼくは、人一倍、不器用で、臆病で、バカで……。だれか強い、権力のある人が、立ち上がってくれたら……」

「おい、なに見てんだ？」

魔物たちの視線が、いっせいにそそがれる。
「お前も、遊びたいの？」
アズサに語りかける。
「お前たちは、人間の街に、なんの用だ」
怒りをにじませ、アズサは前に進む。
「なんの用って？　遊んでるんだけど。言っておくけどな、オレたちは悪いことはしていないぞ」
「なに……？」

「おいおい、お前、共存法を知らないの？　魔物はな、わけもなく人間を傷つけないかぎりは、街に出入りしたっていいんだぜ」

機械人形の一体は、アズサに近よる。

「それとも、この世界は人間様のものなの？　魔物や亜人や動物は、存在しちゃいけないの？」

「いや、それは……」

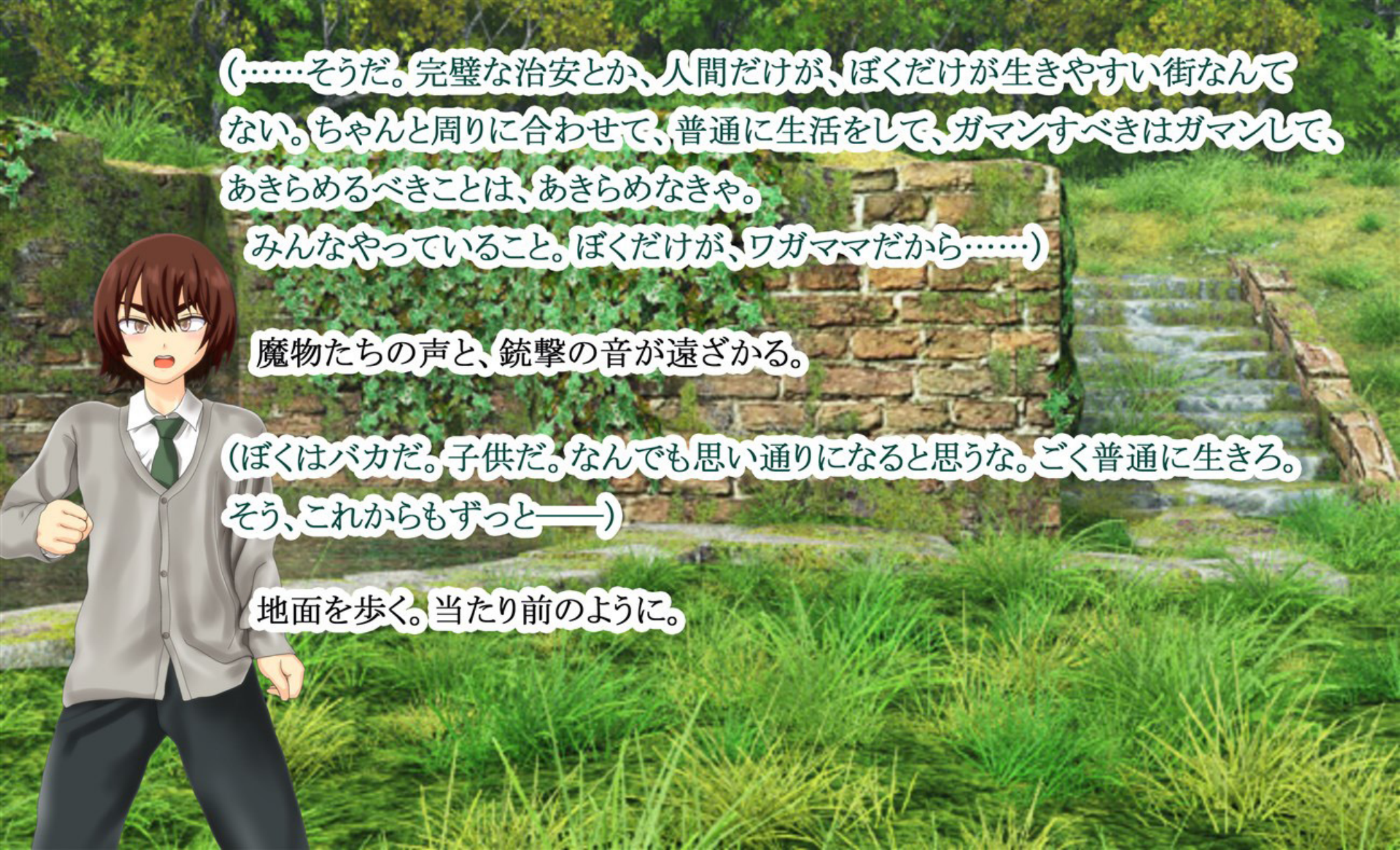
「なにか法律に反してたか？　お前はどんな立場の人間なの？」

「えっと……。べつになんでもない……」

「え？　なんだって？　声が小さくて聞こえねーよ」

アズサは立ちすくんだ。

「なんなのアイツ？　衛兵？」
「知らん。ただのバカだろ」
魔物たちは元の位置にもどり、話しだした。アズサは踵（くびす）を返すと、そこから離れる。



（……そうだ。完璧な治安とか、人間だけが、ぼくだけが生きやすい街なんてない。ちゃんと周りに合わせて、普通に生活をして、ガマンすべきはガマンして、あきらめるべきことは、あきらめなきゃ。
みんなやっていること。ぼくだけが、ワガママだから……）

魔物たちの声と、銃撃の音が遠ざかる。

（ぼくはバカだ。子供だ。なんでも思い通りになると思うな。ごく普通に生きろ。そう、これからもずっと――）

地面を歩く。当たり前のように。

アズサはピタリととまった。心が震える。身体からはみだすように、震え、渦巻く。
耳がジンジンと鳴り、足がフワフワと浮く。歩いていられない。

なぜこんなに震えるんだ。悔しさ？　羞恥（しゅうち）？　自己憐憫（れんびん）？　怒り？

だれに対する？　魔物？　街？　人間？　自分？

アズサは自身と対話をする。逆上した波打つ心。動かない身体。

なにかが、スッと腑(ふ)に落ちた。

「やっぱり、まちがっている。この街が？　ぼくの生き方が？　……そんなの、どっちでもいい」

くるりと、振り向く。銃撃の喧騒(けんそう)へ、歩き始める。
道をふさぐ金属の魔物たち。アズサは目を見開き、それを焼きつける。
なにかを確かめるかのように。

「天使様！　天使様！」

空に向かって呼ぶ。

「なんですか～？」

天使が、再び舞い降りる。

「ああっ。やっぱり、あなたは天使だったんですね」

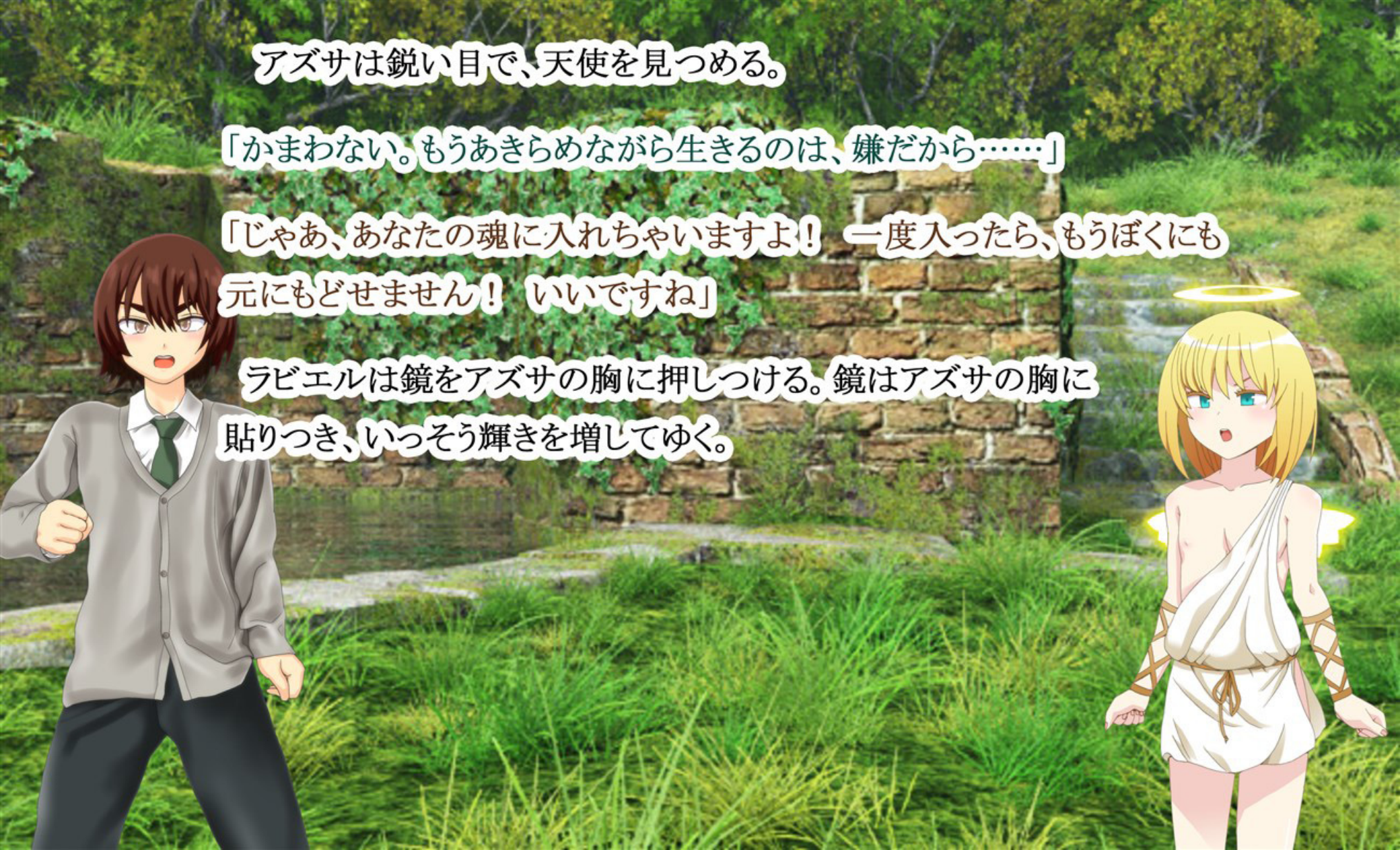
「だから、そう言ったでしょう。なにかご用ですか？」

「天正……ナントカを。ください」

「天正裁之真澄鏡（てんせいさばきのますかがみ）？」

「そう、それ。ください。早く！」

「……本当に、いいんですか？　この鏡は裁きの力。相手を裁くという力は、結果的に、あなた自身が裁かれることにもなりかねません。あなたはその重みに、耐えられますか？」

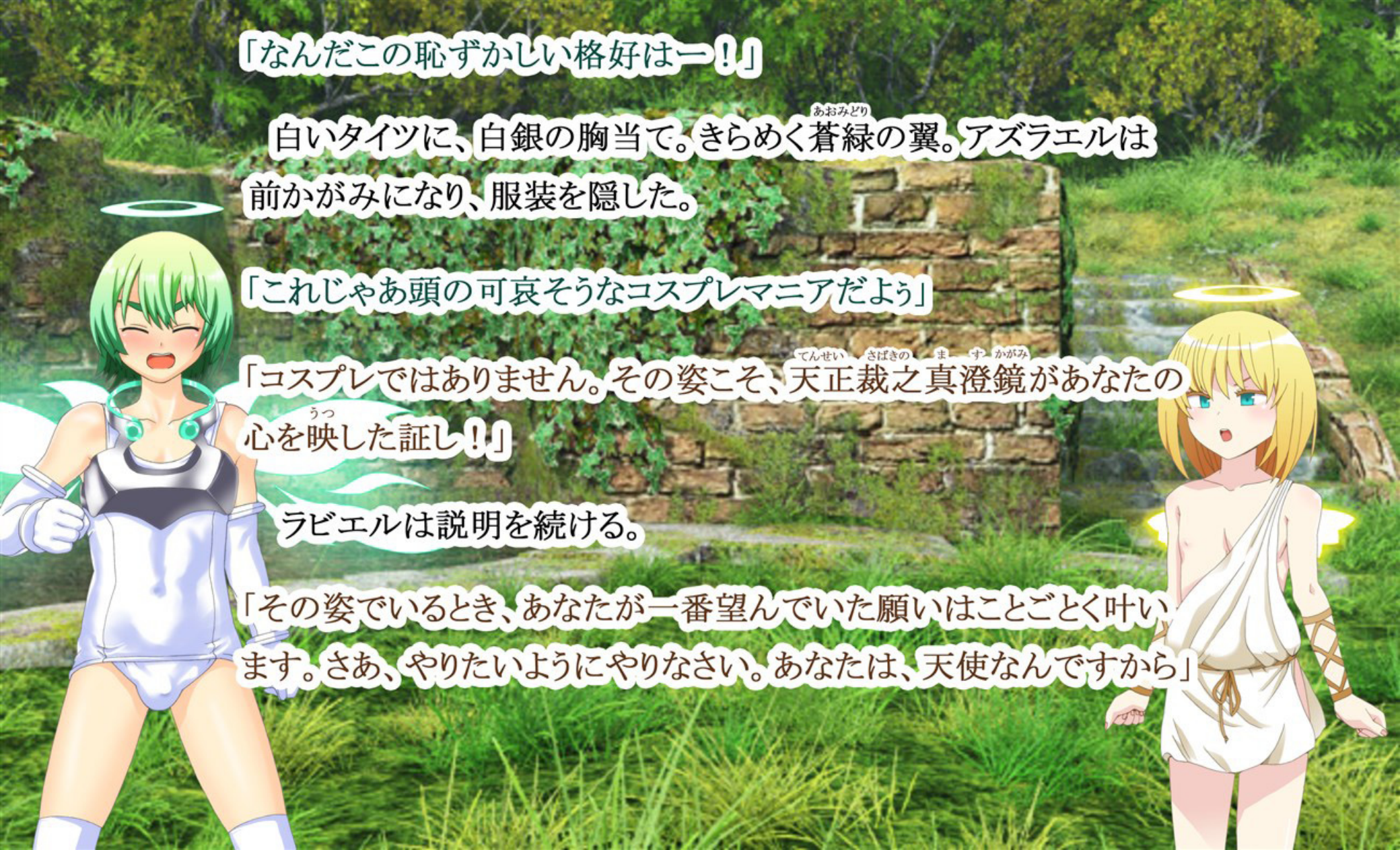

アズサは鋭い目で、天使を見つめる。
「かまわない。もうあきらめながら生きるのは、嫌だから……」
「じゃあ、あなたの魂に入れちゃいますよ！　一度入ったら、もうぼくにも元にもどせません！　いいですね」
ラビエルは鏡をアズサの胸に押しつける。鏡はアズサの胸に貼りつき、いっそう輝きを増してゆく。

アズサの胸の奥が、共鳴する。
そうか。鏡が欲しいって、胸が震えていたんだ。
アズサは理解した。ラビエルの声が聞こえる。
「今、あなたは、天の力を取りこみ、鏡が心の想いを反射し、天使になりました。
その名も……」

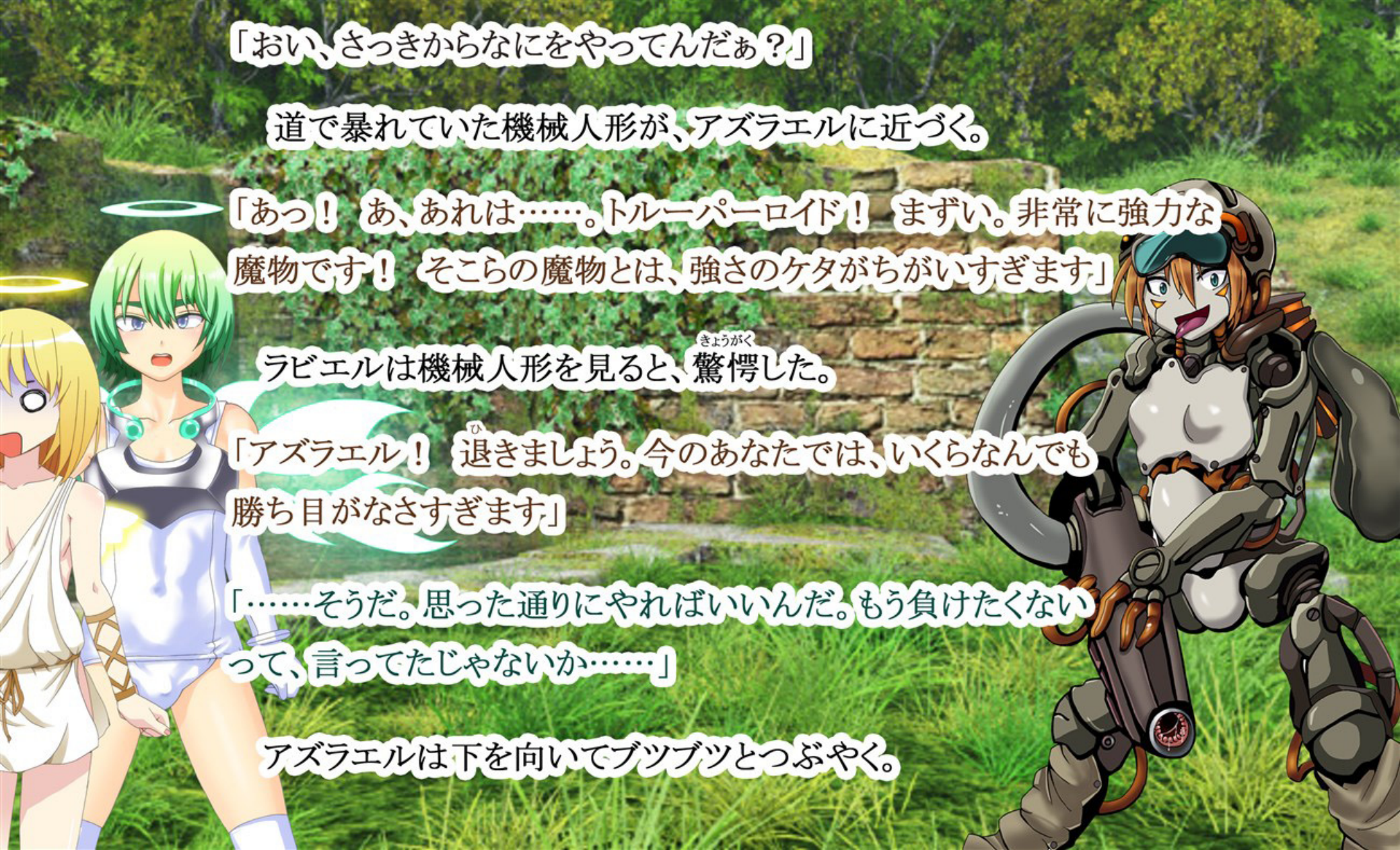
カ
!!

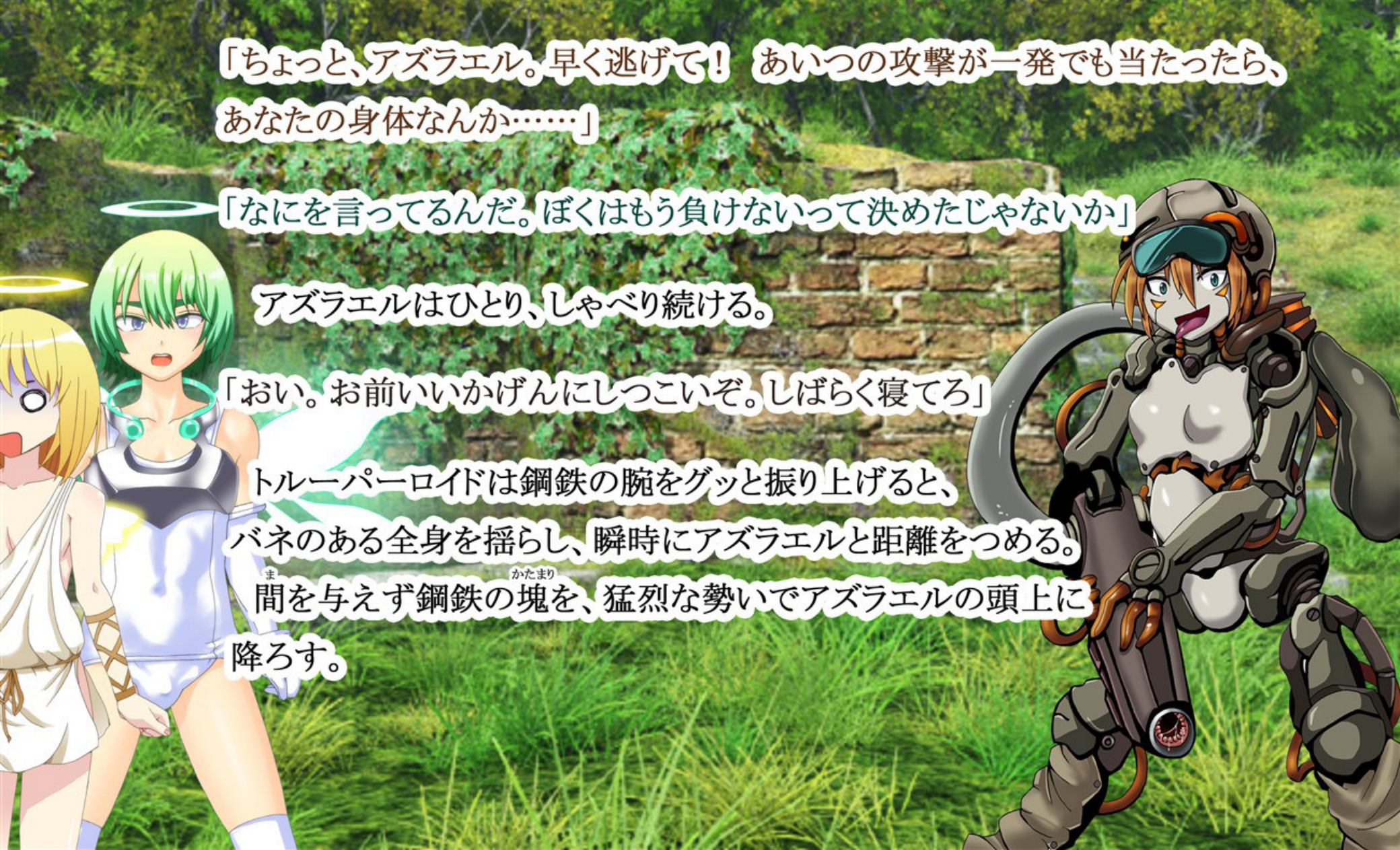
「輝装天使
アズラエル！」

「な……。な……」


「なんだこの恥ずかしい格好はー！」
白いタイツに、白銀の胸当て。きらめく蒼緑の翼。アズラエルは前かがみになり、服装を隠した。
「これじゃあ頭の可哀そうなコスプレマニアだよぅ」
「コスプレではありません。その姿こそ、天正裁之真澄鏡があなたの心を映した証し！」
ラビエルは説明を続ける。
「その姿でいるとき、あなたが一番望んでいた願いはことごとく叶います。さあ、やりたいようにやりなさい。あなたは、天使なんですから」

「本当に、いいの……？　やりたいようにやって。それはゆるされるの？」
「ゆるすも、ゆるさないもないです。あなたには、力があります。願いの強さに応じた力が……」
「でも……」
「使うか、使わないかはあなたの自由です。ただ、願いを叶える力はあります。あなたは、なにを望んでいたんですか？」
「……」


「おい、さっきからなにをやってんだぁ？」
道で暴れていた機械人形が、アズラエルに近づく。
「あっ！　あ、あれは……。トルーパーロイド！　まずい。非常に強力な魔物です！　そこらの魔物とは、強さのケタがちがいすぎます」
ラビエルは機械人形を見ると、驚愕（きょうがく）した。
「アズラエル！　退（ひ）きましょう。今のあなたでは、いくらなんでも勝ち目がなさすぎます」
「……そうだ。思った通りにやればいいんだ。もう負けたくないって、言ってたじゃないか……」
アズラエルは下を向いてブツブツとつぶやく。


「ちょっと、アズラエル。早く逃げて！　あいつの攻撃が一発でも当たったら、あなたの身体なんか……」
「なにを言ってるんだ。ぼくはもう負けないって決めたじゃないか」
アズラエルはひとり、しゃべり続ける。
「おい。お前いいかげんにしつこいぞ。しばらく寝てろ」
トルーパーロイドは鋼鉄の腕をグッと振り上げると、バネのある全身を揺らし、瞬時にアズラエルと距離をつめる。
間(ま)を与えず鋼鉄の塊(かたまり)を、猛烈な勢いでアズラエルの頭上に降ろす。

「ぎゃあああ！　アズラエルっ、逃げてえっ！　ホントに死ぬからあああああッ」

グラップルビート

機械人形の手首が彼の頭を砕くより速く、アズラエルのかかと落しが相手を粉砕する。
トルーパーロイドはゴミクズのように、上半身をバラバラにさせながら地面に叩きつけられた。
「アっ、アズラエル！　うしろっ！　避けてぇーっ」
ラビエルが叫ぶ。
ブッ!!

ストパ
ア
ッ

アズラエルは右足の拇指丘(ぼしきゅう)を軸にそのまま半回転をすると、勢いを利用して背後に虎爪拳(こそうけん)を叩きこんだ。
ズバッ
指を曲げて少し広げ、フックのように叩く。
背後から迫った機械人形は顔面側部がぐしゃりとへこむと、ガクンとヒザが折れ曲がり、後頭部から倒れこむ。

「おおおおおッ」

ラビエルは絶叫する。アズラエルは三体目の機械人形に突進すると、顔面に上段正拳突きを叩きつけた。

ボグッ。

金属のへしゃげる音がひびく。地面に倒れた三体の魔物は、ピクリとも動かない。

「つっ……、つ、強い。強すぎる……！」
ラビエルは唖然(あぜん)としてなりゆきを見守る。
「なんだ……。こんなものなのか。あんなに我がもの顔に、好き勝手に暴れていたのに。
自分たちが攻撃される側になると、こんなにももろいのか……」
アズラエルは三体の機械を、虫の死骸を見るような目でながめた。
「やっぱりあなたは……」
ラビエルがアズラエルに目がけて駆けよる。

「真の、勇者ですーっ」
そのままアズラエルに跳びついた。
「ちっ、ちがうよ。ぼく、勇者なんかじゃないってば……！　ぼくはただ、負けたくなかったんだ、理不尽から。ぼくは、自分のために戦っただけだよ」
アズラエルは顔を真っ赤にして否定した。

「そんなご謙遜を～。いくら天使になったとはいえ、いきなりここまで力を使いこなせるなんて、普通はムリですよー」

「へ？　そっ、そうかなぁ？　えへへ」

「アズラエル。もしかして、武術なんかをやってますか？　やっぱり、強くなりたかったんですね」

「いやいや、そんな。ちょ、ちょっと趣味でね。あはははは……」

アズラエルの足首に、なにかが巻きつく。

ぐんと引っぱられ、視界が逆さまになる。

「でえええええーっ？」
叫ぶアズラエル。強大な臂力(ひりょく)によって身体全体がつり上がり、宙に浮く。
粘り気のある湿った触手が、彼の足首をがっしりとつかんでいた。

「ぐあっ」
触手がしなり、アズラエルは壁に叩きつけられる。
ドガッ

「ぐはっ」

反対側にしなると、地面に衝突する。

「くっ……くっそおおぉ……」
「ふふふ。あなた強いのね。でも、素手じゃあ私の触手に勝てないわ」
不気味な女性の声。
「ぼくは、ぜったいに魔物なんかに負けない……。ぶちのめしてやる……」
アズラエルは魔物をにらみ、闘志をたぎらせる。

「あ、あれは……。ワームビレッジャ。あんな魔物まで街にいるなんて」
ラビエルは触手の腕を持った魔物に驚く。
「おお、怖い。三日後三倍にして返すって面構えね。そんなに私たちが憎いの？」
「当たり前だ。これ以上人間をバカにしたら、ゆるさないぞ……」

「ククク。ムリよ。私たちには絶対に勝てないわ」
複数の触手たちが、アズラエルのあまった足や腕をとらえる。
「どんなに意気がっていても、しょせんは男なんだから……」
彼女の指が、アズラエルの股間のふくらみをつつく。
ピクッ
つん
「はうっ」
アズラエルは声を上げる。